

日本財政論 東洋書房

小野梓日本財政論

春城雜奏

特別  
14  
1919  
814



327  
22

3654

1919  
127

814



本邦ノ政吏ヲ按スルニ其會計法アルハ實ニ明治十  
四年五月ニ始マル然レトモ遠ク上代ニ溯テ之ヲ考  
フルニ古來全ク會計法ナキニ非ラス其一部分ニ至  
テハ間々法令ノ上ニ散見ス依テ茅二章以下ニ説着  
セル會計ノ四大要目即チ豫算出納決算検査ノ四項  
ニ就キ一々其沿革ヲ繹ヌルニ豫算ノ事ハ全然明治  
政府ノ新設ニ係ルヲ見ル  
余顧ニテ大宝ノ遺令隨時所布ノ格式等ヲ按スルニ  
雇役ヲ除クノ外賦役令ヲ按スルニ凡ソ丁ヲ雇ヒ役  
シ者ハ本司預メ当年作ル所ノ色目多クテ數ヘテ  
官ニ申セトアリ未タ事目ノ豫算ニ涉ルモノアルヲ

見ス又々徳川氏ノ遺老ニ就テ其制度ノ如何ヲ叩ク  
ニ皆ナ其制ナシト答フ惟フニ是レ實ニ其制ナカリ  
シナラン蓋シ古上ヨリ以テ近世ニ及ヒ我邦ノ改事  
常ニ同一ノ位地ニ停住シテ甚ク變動ノ勢ヲ為サス  
故ニ經費其物ノ如キモ隨テ不動停住ノ実アリ加フ  
ルニ収入ノ如キハ專ラニ地租ニ取テ著大ノ變動ア  
ルヲ見ス是ヲ以テ歲計ノ豫算其要アルヲ見サレハ  
ナリ降テ明治ノ初年ニ及ンテ猶ホ未ク豫算ノ事ア  
ラズ當時年壯ノ昏生天下ノ改ヲ執リ甚ク意ヲ會計  
ノ事ニ用井ス政府ハ無限ノカアリ隨テ収メ隨テ出  
スヘシト思惟セシカ如シ然レトモ久シカラスレテ  
其甚ク切要ナル所以ヲ知り明治二年五月ニ及レテ

會計ノ事目ニ就キ下問三条ヲ答セリ而シテ其末項  
ハ歳入出ノ事ト題シ添フルニ歳入歳出ノ比較表ヲ  
以テシ以テ其歳入ノ不足シテ歳出ヲ支アルニ是ラ  
ナルヲ示セリ其示ス所感ク豫算ノ本質ヲ備ヘスト  
魚氏量入為出ノ標準トシテ之ヲ調製セシヲ見レハ  
ケレハ之ヲ稱シテ本邦豫算ノ濫觴ナリト云フモ敢  
テ妨クル所ナキカ如シ後キ大藏ノ職權ヲ擴ケテ理  
財ノ統屬ヲ得セシメ全国歳入ノ多寡ヲ總括シテ歳  
出ノ増減ヲ計会スルニ及ンテ明治四年前年ノ要会  
ニ憑拠シテ後生ノ出納ヲ豫算シ復ク豫算額ニ就テ  
實際収支ノ多寡損益ヲ參較シ以テ国用支度ノ便ニ  
供セリ然レトモ是レ唯リ大藏支度ノ便利ヲ謀ルニ

止テ未タ国用ノ賄賂ヲ暈為スルノ意ニ出テス其規  
摸自カラ狭シ降テ六年ニ及ンテ時ノ大藏大輔井上  
君等其職ヲ辞スルニ臨ミ議ヲ朝廷ニ遺シ歳入常ニ  
歳出ヲ支ヘス政府年々其負債ノ額ヲ加フルヲ言ス  
是ニ於テ宇廟議參議大隈君ヲ舉ケテ大藏省事務總  
裁ト為シ以テ會計ノ當否ヲ檢覈セシム総裁乃チ  
現在收支ノ科目ヲ分別シ多寡出入盈虚登耗ノ数ヲ  
統計表記シ以テ六年ノ歳入出豫筭表ヲ作ル是ニ於  
テ豫筭ノ規模漸ク廣キヲ加ヘ又タ大藏省一個ノ便  
利ニ供スルニ止マラス同年十二月ノ末ニ及ンテ金  
穀出納順序ヲ定メ費用概算帳ヲ進呈スルノ制ヲ  
立テ稍々公然豫筭ヲ制スルノ途ヲ為シ翌七年五月

大藏省又タ豫筭表ヲ作り之ヲ内閣ニ呈ス  
斯ノ如クニシテ會計ヲ豫筭スルノ事漸ク行ハルト  
虽氏猶ホ未タ法令ノ之ヲ制スルナク唯タ僅ニ大藏  
卿隨意ニ之ヲ製シ之ヲ内閣ニ呈スルモノタリニ過  
キサリキ是ヲ以テ豫筭ニ関スル諸種ノ要目ノ如キ  
ハ未タ定マル所アラス大藏以内ノ諸官殆ント之ヲ  
知ラサルカ如シ然レトモ直接ニ理財ノ責ニ當リ国  
用ノ料理ヲ任スル者頗ル豫筭ノ用アル所以ヲ感覺  
シ夫ノ會計年度ヲ釐革スルニ及ンテ公ニ豫筭ヲ調  
整スヘキヲ申告セリ是レ即チ明治八年三月十四日  
ト(府縣)五月十八日(官省院使)ノ令達ヲ謂ヒ今其令達  
ニ就テ一々其要目ヲ討查スルニ豫筭ヲ調整スルノ

任ハ各廳ノ長官之ニ當リ之ヲ審査スルノ責ハ大藏  
卿之ニ當リ之ヲ決定スルノ任ハ太政大臣之ニ當リ  
シカ如シ又々毎年調査ノ法ヲ採リ其算出ノ時期ハ  
年度起初ノ以前七月以内ニシテ大藏省ハ之ヲ審査  
スルカ為メ四十五日ノ時日ヲ費スヲ得タルカ如シ  
又々豫算書ハ単純製表ノ法ニ依リ収入経費ヲ分別  
シテ之ヲ二表トシ之ニ副ユルニ各々其明細表ヲ  
以テシ別ニ收支ノ配當ヲ為サス而シテ収入明細表  
ハ収入物品科目名簿ニ拠テ之ヲ作り大科目小科目  
ヲ置キ経費明細表ハ経費概目ニ拠テ之ヲ製シ大科  
目小科目及ヒ細目ヲ置キ等指シ其体裁ヲ具備スル  
ニ至レリ

斯ノ如クニシテ漸ク豫算ノ制ヲ行ヒシト虽モ今日  
日ヨリシテ當時ノ制ヲ見レハ許多ノ遺憾ヲ感セシ  
ムルモノ多クシ蓋シ八年三月ノ令達ハ府縣ヨリ以  
テ官省院使之及ヒ中央地方共ニ其制ヲ行ハシメシ  
カ如シト虽モ當時ノ実況ニ就テ之ヲ見レハ令達ノ  
法規獨リ府縣ニ行ハレ官省院使ノ如キハ箱々之ヲ  
全行セサルノ事實アレハナリ故ニ府縣ノ豫算ハ細  
目ヲ積テ小科目ヲ得小科目ヲ積テ大科目ヲ得能ク  
小ヨリ大ニ及ホスノ正則ヲ得タリト虽モ官省院使  
ニ豫算ハ先ヨ其總額ヲ定メテ而シテ後ニ之ヲ小科  
目ノ變則ヲ用キ豫算決定ノ後ニ在テ其明細表ヲ追  
調スルヲ常トセリ亦後大藏省ハ屢々収入経費科目

ヲ更正セシト虽モ独リ之ヲ府縣ニ及ホシテ之ヲ官  
省院使ニ及ホサス是ヲ以テ府縣ノ豫算ハ年々其改  
良ヲ加ヘ稍々其位置ヲ進メタリト虽モ官省院使ノ  
豫算ハ殆ント不動ノ状ヲ表セリ

十年西南ノ乱ハ陸海軍ノ有用ヲ顯ハセシノミナラ  
ス又夕均シク會計ノ切要ナル所以ヲ知ラシメタル  
カ如シ故ニ其乱ノ平クヤ政府ハ會計検査ノ事務ヲ  
皇張レ遂ニ明治十一年五月ニ當テ検査條例ヲ頒テ  
リ斯ノ條例ハ大藏卿ノ検査局長ニ吟附セシ一種ノ  
命令ナリレト虽モ元ト太政官ノ裁定ヲ經テ之ヲ施  
行シ加フルニ之ヲ官院省使府縣ニ廻送セシヲ以テ  
自カラ法規ノ実カヲ有シ頗ル當時ニ重キヲ為セシ

カ如シ況ンヤ斯ノ條例ハ検査ノ二字ヲ以テ其表名  
ヲ為スト虽モ其実ハ會計法ノ大要ヲ示シ其ル所甚  
夕輕カラス今顧ミテ其幾節ヲ涉獵スルニ第一款第  
一節ニ在テ歳計ノ豫算ヲ稱シテ一歳會計ノ綱領ト  
為シ第二節ニ在テ一歳収出スル金額ノ多寡ヲ調理  
シ歳費ノ目途ヲ確立スルハ會計ノ大基礎ナリト謂  
フカ如キ歳計ノ豫算ヲ重ニスルノ意漸ク当局者ノ  
間ニ深キヲ觀ル但夕其條目ノ如キ多クハ舊制ニ仍  
由シ薄表送致ノ勅ヲ除却スルノ外大ニ改ムル所ア  
ルヲ見ス今マ又別ニ記スヘキモノナシ  
尔後歳計ノ豫算ヲ調査スルノ法變更スル所アリヲ  
見ス一ニ上文所叙ノ法規ニ拠リ其事ヲ舉ケ府縣ハ

細ヲ積テ大ヲ得ルノ法ヲ布キ官院者ハ先ツ其總額  
ヲ定メ而シテ後ニ其細目ヲ追捕スルノ制ヲ布ケリ  
然リ而シテ明治十二年ノ末ヨリ十三年ノ始ニ際シ  
内閣ノ諸氏稍々国会ヲ開設スルノ意アリヤ先ツ銳  
意行政ヲ齊整シ之ヲ開クノ途ヲ為スノ議アリ是ニ  
於テ内閣ノ各員ヲ実行シ太政官ニ置クニ六部ノ各  
課ト會計検査院統計院等ヲ以テシ頗ル政務ノ弦ヲ  
更張セリ此ノ銳意行政ヲ整理スルノ政畧ハ直ニ會  
計ノ整理ニ影響シ過去ノ蹤跡ヲ清クシ未來ノ歩武  
ヲ肅スヘキノ要アリヲ示セリ是ヲ以テ内閣某ノ大  
臣ハ會計ノ整理ヲ以テ當時第一ノ緊要事ト爲シ遂  
ニ會計法ヲ布キ會計検査院ノ職權ヲ定ムルニ至シ

リ而シテ其改制ニ依テ大ニ豫筭ノ方法ヲ改良スル  
ノ機ヲ與ヘ稍々其宣シキヲ得セシムルノ実アリ當  
時余ハ會計部内ノ一官ヲ拜シ而モ會計法ト検査院  
職制章程ヲ起草スヘキノ責ニ當リタルヲ以テ深ク  
意ヲ茲ニ用井他ノ諸人ト共ニ其事ニ從ヘリ而シテ  
當時委負ハ首トシテ豫筭旧法ノ府縣ノ經費ニ精ニ  
シテ官院者ノ豫筭ニ疎ナルヲ痛排シ之ヲ稱シテ蛇  
頭龍尾ノ制ナリト爲ス等頗ル其力ヲ豫筭法ノ改良  
ニ用井夕リ今マ顧ミテ明治十四年太政官第三十三  
号達(當時余等ノ起草シテ内閣ノ決行セシ會計法ニ  
就キ豫筭法ニ係ルモノヲ條叙セシニ第一豫筭ハ會  
計ノ基本ナルヲ示シ)第一條官省院使廳府縣ノ申牒

ニ就キ大藏卿之ヲ調理統計シ会計検査院之ヲ審査  
シ内閣之ヲ決定スルモノタリ(第七條)是ヲ以テ當時  
ノ豫算ハ四箇所局ノ手ヲ經過シテ始メテ決定スル  
ヲ觀行政官之ヲ調製シ一種司法ノ性格ヲ帶フルモ  
ノ之ヲ審査シ立法官(當時太政官)ノ立法府本局タリ  
シ所以ハ余之ヲ鄙著國憲汎論第十六章ノ中ニ記述  
スル詳ナリ読者之ヲ參看シテ可ナリ)之ヲ決定セシ  
ヲ知ル而シテ一種司法ノ性格ヲ帶フル会計検査院  
ヲシテ豫算ヲ審査セシメタルノ一項ハ事全ク新設  
ニ屬シ改米ノ間未タ其实例アルヲ見ス是ヲ以テ當  
時果々、諸人ハ起州ノ始メニ方テ其新奇ノ制ナル  
ヲ議シ甚タ其常經ニ違フヲ論セリ然レトモ當時ノ

吏負特ニ余ハ堅ク其案ノ新奇ヲ好ムニアラスシテ  
己ムヲ得サレニ出ルモノナルヲ辯護シ本邦ノ為メ  
其制ノ至当ナルヲ論セリ一日官友某竊カニ昏ヲ余  
ニ寄セ其法ノ原ク所ヲ問ヒ併セテ改米ノ的例アリ  
ヤ否ヤト問フ余ハ其昏ヲ得テ直ニ左ノ數語ヲ復セ  
リ曰ク会計検査院ヲシテ豫算ヲ審査セシムルノ一  
項ハ敢テ改米ノ的例ニ拠レルニアラス實ニ我邦現  
時ノ情況ニ沿テ其恒レキヲ判セレトスル耳今マ改  
米ノ的例ニ拠テ之ヲ言ハハ豫算ヲ審査シ及ヒ之ヲ  
決スルノ權ハ實ニ国会ニ在テ我邦ヲシテ幸ニ国会  
ノアルアラレメハ其權ハ自カラ之ニ假シ又タ会計  
検査院ノ干預ヲ要セサルヘシ然ルニ今ヤ我邦未タ



国会ノ設ケアラス而シテ内閣ノ大臣ハ職務鞅掌親  
ラ其審査ヲ為スニ堪ホラン故ニ行政官以外ニ立テ  
一種司法ノ資格ヲ帶フル会計検査院ヲシテ其審査  
ニ従事センメント歎スルモノ耳今ノ時ニ當テ内閣  
大臣以外ニ在テ公平周密豫算ノ審査ヲ行フニ堪ヘ  
ルモノハ我カ会計検査院以外果シテ何ノ局アル乎  
又々会計検査院ハ月々ニ各廳ノ出納ヲ監視シ月々  
ニ各廳ノ出納ヲ審査スルノ職権ヲ有スルヲ以テ最  
モ能ク會計ノ得失ヲ知り最モ之ヲ改良スルノ手段  
ヲ知り易シ是レ又々会計検査院ヲシテ歳計ノ豫算  
ヲ審査セシメント歎スル所以ノ一ナリト後々具案  
ヲ出シテ其裁決ヲ乞フニ及ンテ内閣ハ全ク委員ノ

起州スル所ヲ採擇シ之ヲ布達セリ顧フニ何ノ理趣  
ニ依テ内閣ノ之ヲ採擇セシカ余今マ之ヲ明言スル  
ヲ得スト虽氏其意余ノ復言ト大差ナカリシヲ知ル  
ナリ

毎年歳計ノ豫算ヲ立ツルヲ要スル乎否ナ會計法上  
其明文ヲ掲ゲス然レトモ其毎年議定ノ制ヲ採リ夕  
ルノ実ハ茅八條以下數條ノ成文ニ於テ之ヲ明徴ス  
ヘキモノアリ又々明治八年以後ノ实例ニ照シテ之  
ヲ考フルニ毎年議定ノ制ハ本邦慣行ノ法度タルカ  
如シ其間定額据置ノ事ヲ達セシコトアリシト虽モ  
久シカラスシテ止ム故ニ今マ叙ツルコト本文ノ如  
シ

豫筭ニ出、期限ハ年度ノ前八ヶ月ニ在ルヲ新法ノ  
制ト為セリ(第九條)然レ氏實ニ行政官ノ手裏ヲ離レ  
テ豫筭ノ審査ニ從事スルハ前年度中ノ四月ニ在レ  
ハ(第十一條)第十條の切ニ之ヲ言ヘハ年度前ノ三  
ヶ月ニ於テ之ヲ筭出スト云フモ或ハ妨ケナキカ如  
シ読者余カ本篇ノ第二章ニ於テ論定セシモノヲ記  
スルナラン余實ニ年度接近ノ時ニ於テ豫筭ヲ筭出  
スルヲ善トセリ今マ斯ノ法ヲ觀ルニ年度ノ初月ヲ  
距ル僅ニ三ヶ月ノ時、於テ之ヲ筭出スルヲ制ス吾人  
今マ遺憾ナキカ如シ

豫筭昏ノ單一ナルヘキ乎將夕複雑ナルヘキ乎ハ会  
計法未夕示ス所アラス然レ氏當時所設ノ豫筭昏式

ト從來ノ實歷トニ由テ之ヲ言ヘハ實ニ單一ノ制ニ  
依ルヲ見ル又夕收入ノ配當ハ何等ノ制ニ依ル乎会  
計法之ヲ明言セスト雖トモ從來ノ實歷ト豫筭調昏  
ノ式様トニ依テ之ヲ推セハ實ニ混一ノ制ヲ採テ特  
配ノ法ニ依テサルヲ知ル然レトモ費額ノ流用ニ至  
テハ嚴ニ之ヲ制禁シ官省院使ハ太政官府縣ハ大藏  
卿ノ特許ヲ得ルニ非ラサレハ豫筭上決定シタル小  
科目以上ノ費額ヲ流用スルヲ許サス(第十條)第十  
六條

經費ハ其總額ヲ舉クルニ止マラスシテ其明細ニ及  
ホシ小ヲ積テ大ヲ計ルノ制ト為シタルハ(第八條)大  
ニ豫筭調理ノ方法ヲ改良セシモノト云フヘシ按ス

ルニ會計法施行以前ニ在テハ府縣經費ノ豫算ト官  
省院使ノ豫算ハ各ニ其調理ノ法ヲ異ニシ府縣ノ經  
費ハ漸ク小ヲ積テ大ヲ計ルノ制ニ依ルト虽モ官省  
院使ノ經費ハ然ラズ所謂ル先定總額追調明細ノ制  
ヲ採リ預メ先ツ各廳經費ノ總額ヲ定メ而シテ后  
之ヲ各局各課ニ配賦スルノ制ニ依レリ蓋シ是レ各  
廳經費ノ明細ヲ精査スルノ難キ或ハ許多ノ冗費ヲ  
ヲ増加センヲ憂ヒ枉ケテ此制ニ依レルモノナリト  
虽モ抑モ亦夕豫算ノ常經ニ非ラサルヲ知ルヤリ是  
ヲ以テ夫ノ會計法ヲ起艸スルニ當テ其委負ハ意ヲ  
此ノ事目ニ由ヒ豫算ノ常經ヲ全フセンコトヲ勉メ  
夕リ而シテ當時内閣ノ諸大臣モ亦夕從前ノ實歷ニ

由テ先定總額ノ弊アリヲ知り増額ノ稟請數多ナル  
ハ職ラシ之レニ是レ由ルヲ曉リケレハ直ニ委員ノ  
考案ヲ採取シテ之ヲ實際ニ施行セリ  
歲入ハ徵稅費ヲ扣除シテ其純額ヲ示スヘキ乎將夕  
然ラサル乎ハ又夕法文ノ明言ヲ欠ク然トモ從來實  
行ノ豫算各ニ就テ之ヲ講スレハ實ニ徵稅費ヲ併算  
シテ之レカ歲計ヲ立ツルヲ見ル但夕我邦未夕明ニ  
徵稅費ノ目ヲ分タス常ニ租稅局關稅局府縣ノ費中  
ニ在テ其費ヲ寓スルヲ見ル將來宣シテ之ヲ改良ス  
ヘシ  
經費掲記ノ順序モ亦夕法規ヲ以テ定ムル所アルヲ  
見ス然レトモ八年以來隨時布ク知ノ豫算各ニ就テ

之ヲ見ルニ凡ソ左ノ如キヲ觀ル

第一 國債

第二 帝室及皇族費

第三 賞典家祿ノ類

第四 官院省使局府縣費

第五 警察費

第六 堤防費

第七 在外公館費

第八 一時支出費

第九 雜支出費

第十 非常豫備

是ニ因テ之ヲ觀レハ當時我邦ノ制モ亦夕稍々其亘

キヲ得之ヲ以テ學國米洲聯邦等ノ制ニ比スルニ勝ル  
アルモ劣ルナキヲ知ル而シテ一夕ニ之ヲ改良シテ  
之ヲ變スルアラハ其道ニ到ル甚夕難カラサルヲ知  
ルナリ

豫算各ニ付スルニ詳細ノ説明ヲ以テスヘキハ法文  
上明ニ之ヲ掲ケ前々年度ノ實額ト前年度ノ豫算額  
ヲ傍記シ(第九條)并ニ之ニ對スル増減ノ事由ヲ詳記  
ス(豫算各式)ヘシトアリ加ニ大藏ニシテ統計豫算調  
理ノ際其増減ヲ要スルモノアラハ各廳開申ノ事由  
ト大藏卿ノ意見トヲ詳記シ之ヲ太政官ニ出サシム  
ルカ如キ皆ナ是レ豫算ノ由来スル処ヲ説明セント  
スルニ由ルナリ

審査ノ法及ヒ其議定ノ法ノ如キモ又夕皆ナ定ムル  
所ナリ當時會計検査院ハ豫筭審査ノ便ヲ得シカ為  
メ検査官ヲ五分シテ五箇ノ審査部ヲ置キ各々其專  
任ノ方面ヲ定メ又夕斯ノ五部ノ検査官ヲ集メテ共  
ニ歳計ノ全躰ヲ討議セシメ並ニ其報告ヲ得テ内閣  
之ヲ決定スル等ノ制ヲ立テ稍々其宜キヲ制セリ加  
之費額ノ流用經費ノ増額ニ就テ各々定ムル処アリ  
又夕此二項ノ事目ヲ忽ニセサルヲ見ル按スルニ豫  
筭決定ノ後夕費額ノ流用ヲ許サハ自カラ決定ノ豫  
筭ヲ動カレ虚文ノ豫筭タルヲ以テ之ヲ禁スルノ令  
ハ既ニ明治 年 月ノ布達ニ顯シ尔後時ニ隨テ之  
ヲ明ニセリ然レモ當時豫筭法ノ未夕精カラサル動

モスレハ其流用ヲ許サ、ルヲ得サル事アリ故ニ夫  
ノ會計法ヲ偏次スルニ當テ之レカ委負タルモノ最  
モ其意ヲ用テ太政官ノ特許ヲ得ルニ非ラサレハ之  
ヲ行フヲ得サラシメ(第十丑条其事ノ重要ナルヲ示  
セリ)而シテ當時委負ハ以為ラク費額流用ノ事甚夕  
重シ宜シク之ヲ禁止スルヲ正則トスヘシ但夕各廳  
ノ事情ニ於テ或ハ避クヘカラサルノ事アラシ若シ  
之レアラシ乎宜シク事由ヲ具シテ之ヲ太政官ニ稟  
請セシメ會計検査院ノ討議ヲ經テ之ヲ許否スヘシ  
ト故ニ其意ヲ以テ之レカ考案ヲ起シ以テ之ヲ内閣  
ニ呈セリ然レモ内閣悉ク其議ヲ納レス實ニ太政官  
ノ特許ヲ稟請スヘシト制セリ

豫筭外臨時ノ増費ヲ要求スルハ豫筭法周密ヲ極ム  
ルノ国ト虽モ猶ホ或ハ免レズ間々其多キヲ見ルヘ  
ケレハ其法未精ノ国ニ在テ増加ノ額頻多ナルハ敢  
テ怪シムヘキニ非ラス而シテ我邦ノ如キモ当時豫  
筭ノ法未タ其善ヲ尽サス為メニ補充費ノ豫備ヲ妥  
シ増額ノ為メ時々之ヲ支出シテハラントスルコト  
アリ然レニ増額ノ事タル元ト是レ既定ノ豫筭ヲ破  
却スルモノニシテ其係ル所甚タ輕カラス況ンヤ徒  
ラニ其額ヲ増加シテ之レカ檢束ヲ加フルコトナカ  
リセハ其弊也太タ歲計ノ濫用ヲ致スナラニ是ヲ以  
テ當時委負ハ其事ヲ鄭重ニシ一旦増額ヲ請フモノ  
アラハ之ヲ會計檢査院及ヒ大藏省ニ下議シテ之ヲ

許否センコトヲ希ヘリ然レニ内閣ノ大臣別ニ見ル  
所アリ咸ク委負ノ考案ヲ用ヒス方サニ其事由ヲ具  
シテ之ヲ太政官ニ申シ其ノ許可ヲ請フヘシ太政官  
ニ之ヲ許可セハ之ヲ會計檢査院及ヒ大藏省ニ通牒ス  
ト為セリ(第十七條)以上通シテ十項目ハ明治十四年  
五月所定ノ會計法ニ就キ其豫筭法ニ係ル條目ノ大  
要ヲ摘出し之ヲ示スモノニシテ其法未タ善美ヲ尽  
サ、ルモノアリト虽モ豫筭法ノ大體ヲ具備シ稍々  
觀ルヘキアリ之ヲ一變シテ道ニ致ス甚タ難カラサ  
ルヲ觀ル  
斯クノ如クニシテ豫筭ノ法稍々備ハリシト虽モ未  
タ之ヲ實際ニ行ハスレテ止ム蓋シ其制ヲ出ツル十

四年度ノ歳計ニ行フテ得ス將ニ之ヲ十五年度ニ行ハント欲スルニ際シ遂ニ内閣ノ更替ヲ致シ会計法モ亦タ隨テ變更シテ之ヲ實際ニ試ミルノ時ヲ得リレハナリ但タ余ハ之ヲ起艸スルノ榮ヲ辱フセシラ以テ其法ノ未タ実行ヲ徑ス之レカ当否ヲ事實ニ明徴スルヲ得サリシヲ憾ムルナリ

明治十五年一月發布ニ係ル改定会計法ハ條款ノ損益甚タ多カラスト雖モ其實質ニ至テハ著大ノ變更ヲ致シ之ヲ茲ニ詳叙スヘキカ如シ既ニ述説セシカ如ク旧法明治十四年四月所定ノ会計法ニ在テハ豫算ヲ調製スルノ任專ラ各廳ト大藏ニ畀シテ之ヲ審査スルハ會計検査院ノ當任ナリシト雖モ新法ハ則

チ然ラス全ク會計検査院審査ノ條目ヲ削テ之ヲ載セス太政官ハ大藏省所製ノ統計豫算各等ニ就キ直ニ之ヲ審議スルノ制ヲナセリ又夕旧法ニ在テ統計豫算各等ヲ太政官ニ進達スルノ期ハ前年度ノ四月十日ニ在リシト雖モ新法ニ在テハ五月五日ニ改メ大藏ニ與フルニ滿四ヶ月間之ヲ調理スルノ便ヲ以テセリ此ノ二條ノ改定ハ自カラ大藏ノ権力ヲ張大ニシ夫ノ會計検査院ヲシテ豫算ヲ審査スルノ大権ヲ失却セシメタリ其實質ノ變更ヲ見ルヘシ豫算調製ノ法ハ必ス大藏卿ノ意見ヲ附添スルノ一項ヲ加フルノ外新法ヲ以テ加フル所アルヲ見ス又夕減ス所アルヲ見ス一ニ旧法ニ依レルカ如シ

太政官ニ在テ豫筭ヲ審議スルノ制ハ新法載スル所  
アラズ今マ得テ明言スヘカラスト虽モ之ヲ参事院  
ニ下シテ之ヲ審査セシメ以テ之ヲ決スルモノナル  
ヲ知ル然レモ参事院ノ審査ハ僅ニ二周日ヲ出テサ  
ルヘシ之ヲ以テ旧法検査院ノ四十日ヲ費スモノニ  
比スレハ自カラ軽重アルカ如シ  
經費ノ流用ニ至テハ新法頗ル寛緩ニシテ殆ント旧  
法ト雲壤ノ差アルカ如シ蓋シ旧法第十五條(費額ノ  
流用ニ係ル條目ノ精神ハ稍々禁止ノ意ヲ帶ヒ勉メ  
テ既定ノ豫筭ヲ動カスコト勿ラシメント欲スルニ  
アリ新法ハ之ヲ寛緩ニシ唯リ大藏ノ承認ヲ受クニ  
止ノ事勢ノ典察伸縮ニ係ルニ非ラサレハ太政官

ノ許可ヲ請フテ要セサレハナリ又夕豫筭外臨時ニ  
増費ヲ請求スルノ制ハ新旧ノ二法互ニ異同ナキヲ  
得ス既ニ叙スルカ如ク旧法ニ在テハ豫筭外臨時ニ  
増費ヲ要スルアラハ各廳ヲシテ直ニ其事由ヲ太政  
官ニ具陳セシメ其裁可ヲ請ハシメシト虽モ新法ニ  
在テハ大藏省ヲ經由シテ之ヲ太政官ニ稟請スルノ  
制トシ増費ノ際大藏ヲシテ其意見ヲ具申スルノ機  
会ヲ得セシメカ如シ  
之ヲ要スルニ旧法ハ豫筭ノ調査ニ関シテ會計検査  
院ノ権カヲ大ニシ稍々大藏ノ権カヲ限ルノ勢アリ  
寧ロ理財ノ全権ヲ奉ケ之ヲ併置ニ總括シ大藏ヲ以  
テ出納ノ一者ト為サントスルカ如キ勢アリト虽モ



新法ハ大ニ之ニ及シ豫筭ノ調査ニ於ケル會計検査  
院ノ権カハ咸リ管留シテ之ヲ典ヘス却テ理財ノ実  
権ヲ別テ之ヲ大藏ニ與フルノ觀アリ余今マ敢テ被  
此ノ得失ヲ説カスト虽モ二制ノ實質互ニ大差アル  
ヲ知ルナリ

出納ノ事ハ政事ト相伴シテ起ルモノニシテ茲ニ政  
事アルハ茲ニ金穀ノ出納アルハ事ノ必至ナルモノ  
ナリ是ヲ以テ我カ邦ノ如キモ亦夕往古ヨリ出納ノ  
事アリ其規矩モ亦夕時ニ隨テ布設スル所アリシヲ  
知ル然レ氏出納ノ規矩ニ係ル古代ノ文獻多ク今日  
ニ傳ハラズ唯夕太室ノ倉庫令アルヲ見ル耳而シテ

其令條ノ如キモ半ハ散佚シテ威ク後世ニ傳ハラズ  
總ニ昏紀類聚三代格政事要畧ノ諸昏ニ就キ其殘篇  
ヲ見ルヲ得ル耳余今マ義解ニ所載スル者ニ拠テ中  
古出納ノ制ヲ按スルニ闕畧スル所甚夕多クシト虽  
モ又夕其要ヲ得ルモノナリ中ニ就キ出納吏負ノ責  
任ヲ明別スルニ至テハ當時法ヲ作ル者畧ホ其意ヲ  
用井タルカ如シ政事要畧五十九項ニ載スル如ク見  
ルニ即チ曰ク年ノ終リニ兩司各々新故ノ物ヲ以テ  
計会セヨ非理ニ欠損セハ所由ノ人ニ徵セト又夕其  
五十四ニ載スル所ヲ見ルニ即チ曰ク倉藏受ケ納シ  
テ後ニ於テ出シ給ヘシニ若シ欠クアラハ均シク給  
納ノ人ニ徵セル己ニ分付ヲ経ハ後人ニ徵セト稍々

其責任ヲ空フセサルヲ觀ル  
又夕政事要畧五十九ニ載スル所ヲ見ルニ倉藏ノ給  
用ハ皆ナ太政官ノ符ヲ承ケヨ其供奉ニ須工所及ヒ  
要速ニシテ須ヒ給シモノ并ニ諸国式ニ依テ給ヒ用  
ユヘキモノハ先ツ用弁テ後ニ申セトアリ是レ所謂  
ル太政官ノ証符ヲ見テ国用ノ支出ヲ為シ其帝室ノ  
供御ニ奉シ及ヒ事至急ヲ要シ太政官ノ証符ヲ承ケ  
ルニ暇アラサルモノ并ニ諸国ニ在テ既定ノ布告ニ  
批テ之ヲ支出スルモノハ支出ノ後其肯ヲ太政官ニ  
上申セシムルモノヲ謂ヒ畧ホ傳票ヲ登シテ其出納  
ヲ為スノ意ヲ得ルカ如シ  
又夕政事要畧五十九ニ載スル所ヲ見ルニ大藏ハ一

季ニ須工ヘキ物ノ數ニ唯シテ量テ出セ別貯ハ用ニ  
隨テ出シ給ヘトアリ是レ豫定ノ計筭ニ准據シテ毎  
季ノ物ヲ支出シリノ別貯ハ臨時ニ之ヲ支出スヘキ  
ヲ制スルモノニシテ畧ホ出納ノ根法ヲ示スモノト  
謂フヘシ此外猶ホ十數ノ條目アリ或ハ出給ノ順序  
ヲ規シ或ハ帳簿ノ事ヲ示ス等稍々備フル所アリ後  
チ數朝此令ニ准據シテ出納ノ事ヲ舉ケ多ク損益ス  
ル所アリシヲ聞カス然レトモ朝廷ノ改推一タヒ衰  
ヘ武門其政ヲ執ルニ及ンテ此ノ令モ亦夕隨テ行ハ  
レス遂ニ中古ノ遺令ト為リ了ハレリ但夕賴朝ノ政  
柄ヲ執テ以來北條足利豊臣ノ三氏ヲ更ヘ歴代ノ將  
軍若クハ執權ハ果シテ何等ノ制度ヲ布設シ出納ノ

事ヲ整理セシカ文獻ノ微証スヘキモノアラス余未  
タ其言フ所ヲ知ラサルナリ  
徳川氏ノ時ニ及ンテ家康以下二三ノ將軍ハ銳意節  
約ノ政ヲ行ヒ頗ル国用ノ節制ヲ為シ其間慣例ノ出  
納ヲ規矩スルモノアリ漸ク積テ出納ノ事ヲ整理セ  
シカ如シ然レ氏徳川氏ノ制斯類ノ法規ヲ秘匿シテ  
之ヲ公ニスルヲ許サス只々總ニ當該ノ官吏ヲシテ  
之ヲ知ルヲ得セシメ耳是ヲ以テ吾人今之ヲ文獻  
ノ上ニ明徴スルヲ得ス唯夕幕府ノ遺老ニ就キ其記  
スル所ヲ打聽スルノ便アル身余依テ幕府ノ遺老某  
翁ニ就キ其記スル所ヲ叩クニ翁ハ余ノ為メニ説ク  
所詳ナリ今之ヲ尤ニ記シ以テ幕府出納ノ法規ヲ示

ス  
維新ノ始ニ當テハ出納ノ規矩定ムル所アラス隨テ  
納メ隨テ出シ概テ檢束ヲ加ヘサルカ如シ然レトモ  
明治六年五月ニ及ンテ時ノ大藏大輔井上氏財政ノ  
修メ難キヲ論シ其職ヲ辞シ參議大隈君大藏ノ事勢  
ヲ總載スルニ至テ銳意財政ヲ整頓シテ止マス遂ニ  
其年十二月ニ及テ政府金穀出納ノ順序ヲ定メ之ヲ  
正院(太政官)以下各廳ニ達セリ是レ維新政府ノ出納  
ヲ規矩スルノ始ニシテ其財政ニ向テ一段ノ檢束ヲ  
加ヘタルモノナリ今マ其條目ニ就テ最モ其要ナル  
モノヲ擧ンニ第三条第六條ノ如キ即チ是レナリ第  
三條ハ金穀出納ヲ登記スル帳簿ノ賦裁ヲ擧ケ六種

ノ帳簿ヲ要スルヲ示シ会計ノ歴史ヲ明ニスルヲ勉ム夫ノ順序ノ緒言ニ曰ク凡ソ金穀ヲ出納スルノ順序ハ須ラク先ツ簿唇ノ舐裁ヲ精覈ニスヘシト猶ホ信ナリ又茅六條ハ金穀ヲ出納スルハ細トナク大トナク先ツ主務ノ更負ニ於テ其案文ヲ作り具ニ受ケ拂フヘキ金負トソノ事トヲ掲ケ之ヲ廻議ニ付シ長官ノ印ヲ受クヘキヲ申明シ仮令ヒ急遽ノ際ト虽モ些少ノ金負ト虽モ長官ノ捺印ヲ受クルニ非ラサレハ之ヲ出納スルヲ得サラシメ後日ノ為メソノ捺印アル文昏ヲ存照スヘキヲ制スルモノナリ是レ出納原則ノ隨一ナル責任ノ所在ヲ明ニセント欲スルノ意ニ出テ稍々觀ルヘキモノアリ踵テ金錢為替方ニ

係ルノ条約ノ事ヲ制シ後九年ニ至テ之ヲ改正シ各廳ノ吏員ヲシテ現金ヲ監守スルノ勞ヲ省カシメシカ如キハ稍出納原則茅四要義ニ似タリト虽モ間々又夕之カ弊ナキヲ得サラシム降テ明治九年ニ至テ院省廳現金納拂規則ヲ布キ各キ各廳定額現金ノ納拂ヲ収メテ之ヲ大藏ノ手ニ束子タルハ稍々出納ノ原則ノ茅二茅三ノ要義ヲ全フスルニ近ク大ニ出納ノ規矩ヲ改良セシモノト謂ツヘシ今其規則ヲ見ルニ茅一条ハ現金ノ納拂ヲ專掌スル局所ヲ置クヲ申シ茅二条ハ其局所ノ權限ヲ示ス茅三条ハ各廳月額ノ金員ヲ其局所ニ受納ノ順序ヲ示シ茅四条ハ各廳ノ受領證ヲ出スノ秩序ヲ定メ

第五條第六條ハ各廳ノ支出ハ其既定ノ月額ヲ超過  
スヘカラス若シ事アリテ其額ヲ超過セシメサルヲ  
得サルコトナラハ豫メ先ツ大藏卿ノ承認ヲ受クヘ  
キヲ申シ其命令アルニ非ラサレハ其局所ハ支出ヲ  
為サ、ルヲ定メ第五條以下ハ各廳ノ發付スヘキ切  
符ノ制現金授受ノ法等ニ就キテ其細則ヲ示ス等凡  
ソ通シテ第七條先ツ之ヲ正院元老院內務大藏ニ施  
シ次ヲ追テ各廳ニ及ホスヘキヲ申明セリ以テ會計  
ニ從事スル吏員ヲ減シ能ク不正不嚴ノ弊源ヲ防キ  
又夕稍々傳票ニ依テ金穀ヲ出納スルノ實ニ近キヲ  
見ルヘシ  
斯ノ如クニシテ隨時漸ク出納ノ規矩ヲ定ムト雖モ

猶ホ未夕ニテ鎖閉シテ其收支ヲ尽スノ制ヲ設ケス  
明治十年ニ及ンテ猶ホ明治初年ノ收支金穀ヲ出納  
シ殆ント止ム所ナキカ如シ是レ蓋シ新創ノ際百事  
緒ニ就カス以テ之ヲ致セシモノト雖モ抑モ又夕政  
府未夕會計ノ決算ヲ為サス為メニ之レカ畫限ヲ立  
ツルノ必湏ヲ感覺セサルニ因ルモノ多ク然レモ  
政府久シカラスレテ決算ノ已ムヘカラサルヲ知ル  
ニ及ンテ出納閉鎖ノ事亦夕甚夕切ナルヲ知り明治  
十一年七月ニ及ンテ出納閉鎖ノ期限ヲ定メ之ヲ各  
廳ニ達セリ今夕其ノ法文ヲ按スルニ即チ曰ク歳入  
出ハニケ年間ヲ以テ完結スルヲ程度トス大藏省ニ  
於テハ會計年度經過ノ後八ケ月即チ翌年二月ヲ限

り出納ヲ鎖閉スヘシトニケ年ヲ以テ歳入出完結ノ  
程度ヲ為スノ事果シテ是レ其得當ナル乎余亦之  
ヲ明言スル能ハスト虽モ夫ノ出納閉鎖ノ期ヲ立ツ  
ルノ意ニ至テハ寧ロ其美ヲ没スヘカラサルナリ  
同年九月三十日太政官第百四十二号ノ達ハ我方邦出  
納ノ歴史ニ就テ生新ノ年紀ヲ始メタルモノト謂フ  
ヘシ所謂ル第百四十二号ノ存達トハ金錢出納ノ簿記  
ヲ改正シテ複記法ト爲セシモノヲ謂ヒ計算簿記條  
例(同年十一月大藏省達)ノ基テ出ル所ノモノナリ按  
スルニ従前我邦ノ帳簿ハ規矩甚ク備ハラス爲メニ  
入出ノ登記ヲ遺漏錯誤シ唯リ調査考検ノ勞アルノ  
ミナラス間々又々出納ノ矛盾ヲ致シ遂ニ不正不嚴

ノ惡弊ヲ生スルノ虞アリ概シテ之ヲ云ヘハ能ク會  
計ノ史記トスルニ足ラサルナリ故ニ之ヲ改正シテ  
意太利ノ簿式ヲ用ヒ以テ會計史ノ用ヲ全フスルハ  
能ク其宜シキヲ得ルモノト謂フヘシ  
叙次遂ニ會計法發布ノ時ニ及ヘリ既ニ後クカ如ク  
我邦會計法ノ發布ハ明治十四年五月ニ在リテ當時  
内閣ハ財政ヲ整理スルヲ以テ政府ノ急務ナリトシ  
銳意其事ニ從フノ秋ナリ故ニ出納法ノ如キモ最モ  
其意ヲ用ヒ大ニ會計ヲ檢束スルヲ勉メリ當時會計  
法起草委員ハ會計當該官ノ責未タ明カナラス爲メ  
ニ會計ノ整頓ヲ將來ニ期シ難キヲ思ヒ大ニ之ヲ明  
別スルヲ勉メタリキ是ヲ以テ會計法ノ第百二十條

ニ於テ收支ノ命令權ト執行權ノ存在スル処ヲ明ニ  
シ各廳ノ長官ハ之ヲ命令スルノ權ヲ有シ會計主務  
官ハ之ヲ執行スルノ權ヲ保テ命令ニシテ過失錯誤  
アラハ長官其責ニ任シ執行ニシテ過失アラハ主務  
官其責ニ任スルノ制ト為セリ加之會計主務官責任  
分界條例ナルモノヲ布キ會計主務官ノ命免ハ太政  
官之ヲ專ラニシ各廳ノ長官ヲシテ其進退ヲ專ラニ  
スルヲ得セシメサル等ノ制ヲ設ケ以テ會計主務官  
吏ノ半獨立ヲ得セシメタリ此ノ外記簿ノ式樣ヲ定  
メテ容易ニ之ヲ變換スルヲ得セシメヌ(第廿一條)第  
廿二條第廿四條各廳ノ經費ニシテ殘餘ヲ生セハ之  
ヲ大藏ニ還納セシメ(第卅二條)國庫ニシテ歲入ノ

殘余ナラハ之ヲ準備金ニ繰入セシメ(第十九條)現金  
ノ管守出納等ハ大ニ定メ(第卅三條第卅四條)  
出納鎖閉ノ期ヲ立ツル等多クハ旧法ヲ集聚シテ更  
ニ之ヲ編シ以テ各々立ツル所アリ未タ國庫出納ノ  
條規ヲ立ツルニ及ハサリレト云レ又々以テ出納法  
規ノ改良ヲ見ルヘキモノアリ當時ノ人皆テ其法ノ  
會計ヲ整理スルニ益アルヲ稱セリ  
然レト斯ノ法規ハ十一年一月會計法改定ノ時ニ至  
テ多クノ變更アルニ過ヘリ而シテ其變更ノ重要ナ  
ルモノヲ謂ヘハ各廳現金ノ管守ヲ擧ゲテ之ヲ大藏  
ニ皈シタルノ事ヲ以テ其稱首トス今十四年五月所  
定ノ法規ヲ按スルニ現金ノ管守ハ各廳各々其事ヲ

親カラシ稍々勉メテ會計ニ從事スル吏負ヲ減少ス  
ルノ原理ニ副ハサルモノアリシト虽モ此ノ改定ニ  
拠テ畧々其恒キヲ得タルカ如シ然レトモ斯ノ法規  
ハ咸ク能ク之ヲ實際ニ行フヲ得ル乎今得テ之ヲ明  
言スヘカラズ余ハ唯々其必行ノ実アラシクテ希フ  
ノニ明治九年ノ頃ニ當テ既ニ此ノ類ノ法規ヲ布ク  
ト虽モ久シカラスレテ罷ム其必行ノ甚々容易ナラ  
サリシヲ思ヘハナリ又々斯ノ改定ニ依テ會計検査  
院ノ推力ハ巨大ノ減殺ヲ蒙リタルヲ見ル蓋シ明治  
十四年所定ノ旧法ニ拠レハ會計検査院ノ記簿ヲ以  
テ政府ノ原簿ト爲シ各廳記簿ノ變更取捨皆テ會計  
検査院ノ承認ヲ請ケレシメシト虽モ改定ノ法ニ在テ

ハ国库出納ノ記簿ヲ除クノ外其式様ヲ變更シ其種  
類ヲ取捨スル等一ニ皆テ大藏ノ承認ヲ請クルヲ以  
テ其制トシ會計検査院ハ曾テ其間ニ関セス隨テ政  
府會計ノ原簿ヲ備ヘテ之ヲ會計検査院ニ置クノ制  
ヲ廢セリ又旧法ニ拠レハ大藏省ヲレテ毎日国库ノ  
出納ニ係ル金額科目及ヒ事由ヲ詳記シ之ヲ會計檢  
査院ニ報告セシメ以テ會計検査院ヲレテ日々豫  
算額ト実出納ノ比較ヲ爲スヲ得セシメ以テ豫算ヲ  
監視スルノ一端ヲ爲セシメシト虽モ(第廿八条)改定  
法ニ在テハ之ヲ改メテ每一月ト爲シ大ニ其關係ヲ  
變更セリ(第廿六条)之ヲ要スルニ旧法ハ會計検査院  
ノ権力ヲ大ニシ新法ハ之ヲ與ヘサルノ着アリ以テ



其精神ノ互ニ相異ナルルヲ見ルヘシ

我邦決算制度ノ沿革ヲ繹タルニ上代ノ事文献ノ徴  
スハキナシト雖モ爾餘ノ制度ヲ推シテ之ヲ考フル  
ニ主勢ノ官吏交替ノ際之ヲ行ヒ年々之ヲ施行セシ  
モノニ非ラサルカ如シ(税帳若クハ雜物費用現在帳  
ハ年々進申セシト雖モ)蓋シ当時ニ在テ豫算ノ事未  
ク本邦ニ行ハレス隨テ収メ隨テ出シ又ハ盡限スル  
所ナキヲ以テ夫ノ責任ヲ解由スルノ外之カ決算ヲ  
要スル事ナケレハナリ降テ徳川氏ノ時ニ及ンテハ  
幕府年々之ヲ決算セシメシカ如シ慶安四年正月五  
日ノ令條ヲ見ルニ「毎年三月五日ヨリ御勘定始メ去

年ノ分ハ被致中勘定其餘ハ皆済尤ナリ若シ皆済可  
在之御勘定及遲滞候得者御藏改ノ上滞候仔細ハ余  
議可有之候間可被得其意事トアリ以テ其概要ヲ見  
ルヘシ余又之ヲ佐賀ノ父老ニ聽ク当時佐賀藩ノ存  
スルヤ三年ニ一回決算ヲ行フノ制ヲ立テ毎三年會  
計ノ吏負ヲ遷替シ非職ノ者退テ就職間ノ會計ヲ整  
理シ其決算ノ正当ヲ証明スルヲ法トセリト以テ藩  
制ノ一斑ヲ見ルヘシ

維新ノ始メ幕府ノ旧例ヲ損益シテ之ヲ行フト雖モ  
固ヨリ精覈ナル者ニ非ラス加フルニ明治四年以前  
ニ在テハ各藩猶ホ其封土ヲ私有シテ自カラ其歳計  
ヲ為シ官省府縣ノ如キモ亦百姓々其出納ノ方規ヲ

異別セシヲ以テ未タ国計ヲ詳悉スルヲ得ス隨テ決  
算ノ法モ亦タ其確的ヲ得ルニ至ラザリシ  
明治二年九月ニ至テ出納諸帳簿整理ノ期ヲ整定シ  
前年十月ヨリ起リ後年九月ニ至ルノ一周年ヲ期シ  
之ヲ進納セシム是レヨリ先キ出納ノ計会ハ正月ニ  
起リ十二月ニ終ルノ制ニ擬シリト虽モ是レ元ト曆  
数ヲ以テ之ヲ限ルモノトシテ金穀出納ノ実況ニ適  
スルモノニ非ラス故ニ之ヲ釐正シ以テ上文ノ制ト  
為ス後チ廢藩置縣ノ事アルニ過ヒ歲計ノ權衡ク大  
藏ニ集マリ五年ノ改曆ニ至テ會計年度ヲ改ムルヤ  
決算ノ期モ亦モ隨テ改マレ  
斯ノ如クニシテ毎年決算ノ制漸ク立ツト虽モ其之

ヲ實際ニ舉行セシハ明治八年ノ後ニ在リシカ如シ  
七年十一月大藏省ノ達ニ曰ク  
金穀出納勘定仕上ノ儀ハ其年限リ分界ヲ立テ決  
算致シ其年ニ屬ス収入経費等翌年勘定ニ編入候  
儀無之候勿論ニ付尔後毎歲最末ノ勘定帳へ左ノ  
文例ニ照準シ記載可致此旨相達候事  
以テ當時ノ実況ヲ推知スルニ是レ後チ月ヲ閱スル  
ニツ八年五月ニ至テ大藏省ハ決算明細簿ヲ編製ス  
ルノ規程ヲ定ム今マ其要切ナルモノヲ按スルニ其  
目凡リ三アリ一、曰ク右廳ノ納進ノ勘定帳ニ憑テ  
詳密ニ歳入出ノ數額ヲ統計シ之ヲ以テ既定ノ豫算  
額ニ對比シ国計ノ盈縮賦賦ノ殖耗ヲ查明シ毎年六

月ヲ期シテ之ヲ大藏卿ニ進メ以テ將來財勢ノ考査  
ニ供シ且ツ決算表ヲ作ルノ基礎トスニ曰ク決算  
ノ際租米ノ如キハ時價ニ依テ官賣シ其定價ニ取ル  
但シ其米ヲ支出スルハ各地方貢納時價ニ依リ剩  
除ノ實米モ亦タ其時價ニ準算ス三ニ曰ク一切會計  
ノ員數ハ各廳ノ勘定帳若クハ他詳明ノ會計簿ニ  
就テ之ヲ精算シ更ラ之ヲ歲入歲出追調簿ニ對照  
計査シ實際ノ收支ト岐スルナキヲ明ニス而シテ  
追算簿ニ編入スル一時経替ノ金負ハ歲計ニ関涉セ  
サルヲ以テ明カニ其事類ヲ区分シ相錯綜スルナキ  
ヲ期スト稍々以テ實ニ憑テ其決算ヲ了シ敢テ修飾  
スル処ナキヲ見ルヘシ

斯ノ如クニシテ歲計ヲ決算スルノ制度漸ク成ルト  
虽モ當時未タ之ヲ必行スルニ至ラズ其ヲ必行セ  
シハ實ニ明治十一年六月ニ在リ十一年二月廿八日  
大藏省ノ達ニ曰ク

八年六月以前ニ係ル收入及ヒ経費金ノ儀未タ精  
理ニ至ラサル向モ有之候如右收出ノ儀ハ本年三  
月十五日ヲ以テ閉鎖致シ候条全日迄ニ納拂順序  
難相整分ハ租税其他ノ收入及経費共勘定帳上於  
テ一旦打切決算証書交付可致左右打切ノ金負ハ  
其事由ヲ記載シ明細報告書ヲ以テ完結候儀ト相  
心得自然完結ノ際ニ方リ過不足相生シ候節ハ細  
拂取計候年度ノ税外收入及ヒ経費勘定帳中ニ雜

部ヲ設ケ整頓候様可致此旨相達候事

以テ其必行ノ十一月三月後ニ在リシヲ見ルヘシ  
踵テ十一年四月ニ及ンテ時ノ大藏卿ハ検査條例ヲ  
奏上シテ制可ヲ乞ヒ之ヲ検査局ニ達シ並ニ各廳ニ  
通報ス而シテ其名ハ検査ナリシト雖モ其實ハ會計  
法ニシテ預ル所甚ク大ナルモノアリ今其條款ヲ通  
觀シ之ヲ考フルニ多クハ従前ノ慣行ヲ集輯シテ之  
ヲ書載シ以テ之ヲ公ニシ又々會計年度経過ノ後一  
周歳ニシテ總凡ノ収支ヲ完結シ更ニ歳入出決算表  
ヲ調製シテ之ヲ大藏卿ニ呈出スルノ制ヲ立テタリ  
既ニシテ十一年七月出納鎖閉ノ期ヲ定ムルヤ歳入  
出決算完結ノ程度ヲ定メテ二十年間トシ年度ヲ經

過スルノ後八ヶ月ニシテ出納ヲ閉鎖シ二十四ヶ月  
ニシテ決算ヲ完スルノ制ヲ定ム其制タル之ヲ往  
昔ノ者ニ比スレハ既ニ數層ノ進歩アリト雖モ猶ホ  
未タ滿タサルモノアリ偶々世ヲシテ遲延ニ失スル  
ナカラシコトヲ恐レシム

歳計ヲ決算スルノ制既ニ定マルト雖モ其決算ヲ公  
ニシテ之ヲ世ニ示スノ制ニ至テハ未タ定ムル所ア  
ラス頗ル人民ヲシテ其遺憾ヲ覺ヘシメリ然レモ此  
憾ヤ久シカラステ之ヲ散スルノ機アルニ遇ヘク  
明治十二年十二月ニ至テ大藏卿ハ明治元年一月ヨ  
リ八年六月ニ至ルノ決算表ヲ制シ之ヲ太政官ニ進  
メ太政官ハ翌年二月ヲ以テ之ヲ各廳ニ公達セルナ

り其長タル唯り之ヲ各廳ニ公達スルニ止マリ人民  
ニ布告セルモノニアラズハ來々明言レテ世ニ公  
示セシモノト謂フヲ得スト然レ其實ニ至テハ之ヲ  
世上ニ公示セシモノニ外ナラス猶々吾人ヲシテ其  
遺憾ヲ散スルノ端緒ヲ得セシメタリ雖テ會計法創  
定ノ時十三年ノ末十四年ノ始ニ及レテ當時ノ好閣  
ハ頗ル決算ノ事ヲ輕セス會計法調査委員ニ命シテ  
之ヲ忽畧スルコトナカラシム是ヲ以テ委員ハ敢テ  
其事ヲ輕忽ニセス以テ豫算ノ目的ト為ス所實  
ニ此ノ決算ニ在リト故ヲ以テ會計法ノ開卷第一條  
ニ於テ會計ハ豫算ニ起リ之ニ拠テ出納レ決算ニ結  
了スルノ數句ヲ掲ケ更ニ進レテ太政官ヨリ之ヲ公

達スヘキヲ申明セリ(第四十條)是ニ於テ乎決算ヲ  
公ニスルノ制始メテ定マリ頗ル會計法ノ進歩ヲ見  
ハセリ但々惜ムラクハ當時ノ法猶ホ未タ之ヲ公ニ  
スルノ期ヲ立テス以テ世ヲシテ其何ノ時ヲ以テ之  
ヲ公達スルヲ知ラサラシム蓋シ又々憾ムヘキナリ  
然レ氏其四十七條等ヲ通覽スルニ大藏省若クハ  
餘ノ諸廳ハ出納閉鎖ノ後五ヶ月乃至六ヶ月ヲ限リ  
其決算報告春ヲ編製シ之ヲ會計検査院ニ差出スヘ  
シトヤリ又々著者自家ノ記憶スル所ニ拠テ之ヲ云  
ヘハ當時會計検査院ハ歳入出決算報告春ヲ編成シ  
其年度経過ノ後十八ヶ月ヲ限リ之ヲ出納ニ進呈ス  
ルノ内規ヲ立テタルモノナレハ決算ヲ公ニスルノ

規ハ年度経過ノ後モ一年有半ノ時ニ在リテ明治十七年度ノ決算ハ明治廿年十二月ニ於テ之ヲ見ルヲ得ルノ制タルヲ知ルヘシ

然レモ斯ノ制ハ其実行ヲ經スレテ改定アルニ遇ヘリ所謂ル改定トハ十五年一月第廿五号ノ達ヲ謂ヒ實ニ此ノ官達ヲ以テ上文ノ制度ヲ一變セリ而シテ其變更ノ大ナルモノヲ云ヘハ第廿一決算ヲ公達スルノ明文ヲ除キ第廿各廳報告ノ期ヲ緩フスルモノヲ以テ其最モナルモノトス蓋シ旧法ニ拠レハ明カニ第廿四條ヲ以テ決算ヲ公達スル正文ヲ掲クトモ新法ニ在テハ第廿四條中大藏省及ヒ各廳ノ長官ニ對シテ認可ノ旨ヲ達スルノ文句アルノミニシテ

稍々公達ノ意義ヲ改様セシカ如ク又旧法ニ拠レハ各廳ノ決算報告各ヲ出スハ出納閉鎖ノ後五ヶ月乃至六ヶ月ニ限り十七年度ノ決算報告各ハ十九年ノ七月乃至八月ニ限り進納スルノ制アリトモ改定ノ法出ツルニ及ンテ稍々其期ヲ緩ニシ翌々年度ノ上明世一日ヲ限ルヲ制ト為シタレハ決算ノ報告ハ年度経過ノ後廿三ヶ月ニシテ決算報告ハ廿年ノ五月ヲ過キサレハ検査院ノ審査判定ヲ經サレノ法トナリタレハナリ蓋シ是レ已ムヲ得サルモノアリテ然ル手余今之ヲ云々スルヲ得サレナリ

記叙ノ步漸ク前往シテ會計法ノ通則ニ係ル古來ノ

沿革ヲ叙フルノ時ニ及ヘリ既ニ述フル如ク會計法  
通則ノ要目ハ實ニ四ツナリ曰ク會計年度曰ク年度  
ノ區別曰ク歲計ノ區別曰ク歲計ノ科目是レナリ  
今ヤ進シテ此四目ニ係ル古來ノ沿革ヲ繹スルニ茅  
一會計ノ年度ヲ別設スルハ古時邦人ノ嘗テ試ミサ  
ルモノ、如シ降テ豪雄割拠ノ時ニ及ニテハ其制度  
得テ考フヘカラス徳川氏軍職ニ當ルニ及ニテ始メ  
テ會計ノ年度ヲ別設セシヲ見ル聞ク徳川氏ノ制ハ  
曆年ニ沿ハス毎年九月陰曆ヲ以テ總勘定ノ時期ト  
シ以テ其年ノ會計ヲ統理セシト顧フニ是レ會計ノ  
年度ヲ別設スルモノニシテ其意暗ニ泰西ノ制度ニ  
合フ而シテ其終結ヲ九月陰曆ニ採リ十月ヲ以テ年

度ノ起初ト爲シタルハ我邦ノ如キ地租ヲ以テ歲入  
ノ多鄙ヲ充タシ而カモ其土地ハ稻米ヲ耕作スルノ  
水田多キ邦出ニ在テ甚夕空シキヲ得タルモノト謂  
フヘシ蓋シ水田ノ收穫ハ皆ナ九月以後ニ在テ農家  
ニ入り農家ノ租ヲ納ル、實ニ十月ニ始マリ翌年三  
四月ニ至ルモノナレハナリ顧フニ是レ數十年ノ實  
踐ニ依テ其已ムヲ得サルヲ察見シ遂ニ此制ヲ爲ス  
ニ至リタルモノ乎西人言ハク法ハ用須アルニ依テ  
立ツト誠ニ我レヲ欺カサルヲ知ルナリ  
維新ノ初ニ當テ威ク旧制ヲ廢シテ新ニ法度ヲ立ツ  
ルノ意最モ當路諸人ノ間ニ深ク苟モ旧制ト云ハハ  
其實質ヲ問ハス一概ニ之ヲ擲抛シ去ルノ勢アリ故

ヲ以テ会計年度ノ如キモ其廢止ヲ被ムリ幕府  
実験ノ成例ヲ行ハス唯々曆年ニ沿フテ其会計ヲ為  
シ正月ニ起テ十二月ニ終ルノ制ト為セリ然レモ徵  
租期限ノ如キハ勢ニ其旧法ヲ変革スルヲ得サリシ  
ヲ以テ正月ニ起リ十二月ニ終ルノ制自カラ之ト合  
ハス遇々之ニ依テ決算ヲ為スモ唯リ一年ノ界限ヲ  
以テ之ヲ算定スルニ止リ實際金穀出納ノ年計ニ適  
合セサルモノアリ

是ヲ以テ明治二年九月ニ及ンテ出納諸帳爲整理納  
進ノ期ヲ整正シ毎年十月ニ起リ明年九月ニ至ルノ  
一周年ヲ期シテ出納ヲ整理上計セシムルニ至レリ  
是レ實ニ會計ノ年度ヲ改定セシモノニシテ之ヲ幕

府ノ旧制ニ復シタリト謂フモ或ハ妨ケナキカ如シ  
斯ノ如クニシテ會計ノ年度復々幕府ノ旧制ニ復シ  
再ニ會計ヲ整理スル便ヲ得タリト雖モ久シカラス  
レテ斯ノ制ヲ変革スヘキノ機アリニ遇ヘリ所謂ル  
斯制ヲ變革スヘキノ機トハ五年十一月改曆ノ令ヲ  
謂ヒ其令ノ出ヅルヤ勢ヒ亦々會計ノ年度ヲ一變セ  
サレヲ得ス是ニ於テ又々之ヲ改定シテ曆年ニ沿フ  
ノ制ト爲シ歲ノ一月一日ニ起リ十二月三十一日ニ  
至ルヲ以テ一年度トシ以テ其會計ヲ結算セシメタ  
リ  
此法ヲ實施スル僅ニ一年會計當該ノ官司ハ忽チ又  
タ其制ノ非ナルヲ知リ到處會計ノ決算ハ曆年ニ沿



ヲ得サルヲ登見し明治七年八月に至テ時ノ大藏  
卿ハ會計年度ヲ整正シテ前年七月一日ニ起リ後年  
六月三十日ニ終ルノ制ト為サンコトヲ奏セリ既ニシ  
テ内閣ハ其議ヲ納レ同年十月ニ至テ之ヲ改正セリ  
大藏卿大隈君ハ嘗テ明治元年一月ニ起リ八年六月  
ニ終ハル八年間ノ歲計決算各ヲ呈ハルニ際シ之ニ  
付スルニ備考ノ一吞ヲ以テシ以テ出納法度ノ沿革  
ヲ叙セリ中ニ就キ會計年度ヲ改定セシ所以ヲ叙シ  
テ曰ク

是ヨリ先キ一歲ノ入出ヲ計理スルヤ歲ノ一月ヨ  
リ十二月ニ至ルヲ一朔トシ以テ收入ト支出ノ數  
額ヲ計結セリ然ルニ租税納入ノ期多クハ甲乙二

歲ニ交渉シ乙歲ノ夏秋ニ至リ方サニ始メテ甲歲  
ノ數額ヲ完納スルニ由リ曆歲ニ從ヒ其收入支出  
ヲ繕算スル中ハ交互錯雜ノ患害多キヲ免レ是  
ヲ以テ會計年度ノ方法ヲ一變シテ甲歲七月ヨリ  
乙歲六月ニ至ルヲ會計上ノ一周年度ト為シ以テ  
其年度ニ屬スル一切ノ收入支出ヲ完結スルノ儀  
ニ決セリ又各官廳ヲシテ收入概計表經費豫算表  
ヲ錄致セシムルノ條規ヲ頒付スト

以テ改定ノ意ヲ明ニスルニ至ル此ヨリシテ以後屢  
々出納ノ法規ヲ改良シ頗ル増損スル知アリシト雖  
モ唯リ會計ノ年度ニ至テハ恒ニ七月ニ起リ六月ニ  
終ハルノ制ヲ沿襲シ十一年九月所定ノ検査條例等

一節十四年四月制定ノ會計法(第二章)十五年一月改定ノ會計法(第二章)等皆之ヲ明記シ以テ會計上ノ一大法度トス

年度ヲ區別シテ甲年ノ收支ト乙年ノ收支ヲ混一スル勿カラシムルノ一題ハ上代ノ令幕府ノ制ニ於テ未タ見聞スル如クハ惟フニ當時暮夕其区分ヲ重セス以テ之ヲ忽畧ニ付セシニ因ルモノ乎隣ヲ維新ノ初ニ當テハ唇生直ニ起テ天下ノ大政ヲ料理ト甚夕意ヲ會計ノ整理ニ用ヒス隨テ收メ隨テ出シ又夕甲乙彼此區別ヲ為スコトナキニ了レリ是ヲ以テ甲年ノ收入ニシテ乙年ノ經費ヲ支へ乙年ノ收入ヲ以テ甲年ノ經費ニ充ツルモノアリ殆ント條緒ナキヲ

見ル然レハ斯區分ナキノ制ハ以テ會計ヲ整理スル所以ノ道ニ非ラズ是ヲ以テ明治七年會計年度ヲ釐正スルヤ漸ク其区分ノ切ナルヲ知り遂ニ八年三月ニ及ンテ甲乙彼此ヲ混淆スルナカラシム(八年三月)第二章三十三号(達)ニ後相ト踵テ其事ヲ明ニシ會計法制定ノ時ニ至テ之ヲ總則ニ載セ甲年ノ收支ニ係ル金額ヲ以テ乙年ノ收支ニ混用スルヲ得スト謂ヘリ(第二章)後チ其法ヲ改定スルニ及ンテ其條目ノ位置ヲ变换スト虽モ其條文ニ至テハ又夕变换ヲ蒙ルルコト無シ歲計ヲ區別スルノ門目モ亦夕維新後ノ新設ニ係リ實ニ洋外ノ法ニ模倣セルモノナリ明治八年三月豫算計表調査ノ事ヲ定ム當時政府ハ經費概目

予定ノ之ヲ府縣ニ布ケリ是レ我邦ニ在テ歲入ノ区  
 分ヲ立ツルノ始ニシテ當時實ニ定額常費額外常費  
 臨時費ノ三日ヲ置キ定額常費ハ給典中費ノ如キ  
 毎歲其費額ヲ定メ毎月或ハ毎半々年之ヲ各廳ニ交  
 付スルモノヲ謂ヒ額外常費トハ給典等ノ如キ毎歲  
 費程ヲ豫算シ費額ヲ確定セヌ毎件其事由ヲ詳委シ  
 時々成規ニ從ヒ之ヲ大藏省ニ請求スル平常ノ費用  
 ヲ稱シ臨時費トハ大工業或ハ新建築等ノ経ニシテ  
 一案一万圓以上ヲ費ス者等ノ如キ 用以外ノ経費  
 ト稱ス今マ其ノ回表ヲ製スルニ方サニ在ノ如シ

明治八年所定府縣経費概目回表

官負月給	譯官月給	陸臺素以下月給	在月給	諸在給	内国旅費	諸賄料	宿代	被服費	賜饌料	恩賞
------	------	---------	-----	-----	------	-----	----	-----	-----	----

給典

廳中費

需用費

運送費

郵便電信

送拜式入費

接待費

地租取立費

雜費

官負月給

等外月給

在月給

諸雇給

旅費

史誌編輯費

厩費

需用費

諸雇給

需用費

馬買上

等外月給

在月給

諸雇給

内国旅費

宿代

諸賄料

需用費

恩賞

定額常費人

警察費

羅卒費

被服費

雜費

官負月給

等外月給

雇月給

諸雇給

内國旅費

諸賄料

需用費

被服費

雜費

諸備給

囚獄費

内國旅費

諸賄料

需用費

囚人賄料

被服費

忌者費

諸備給

内國旅費

諸賄料

需用費

懲役人賄料

患者費

懲役費

額外常費

外國船運費	外國人諸費	羅率費	警察費	廳中費	恩賞
諸賄料	恩賞	恩賞	恩賞	恩賞	恩賞
需用費	賜饌料	處刑海支那人入費	賑恤	需用費	恩賞
	諸存給	外國旅費			

結典

居留地諸費	外國人諸費	被服費
諸存給	賄料	痛月給
常夜燈費	宿料	內國旅費
家祿		
賞典祿		
社寺祿		
終身扶持		
賜饌料		

被服費

諸雇料

諸賄料

需用費

禁錮人賄料

患者費

諸雇給

需用費

復籍人賄料

供米費

祭典費  
大工業新建築  
隄防沿河道路橋梁新設修繕

臨時費

後千屢々其科目ヲ变换シ増損スル処少ナカラスト  
虽モ夫ノ經費ノ区分ニ至テハ會計法創定ノ時ニ至  
ルマテ常テ変更スル所ナク依然定額常費額外常費  
臨時費ノ三日ヲ用ヒタルヲ知ル

斯ノ如クニシテ經費ノ区分漸ク成ルト至モ唯リ之  
ヲ府縣ノ經費ニ充用スルノニヒテテ未タ之ヲ中央  
各廳ノ經費ニ及ホサス唯タ国庫ノ出納上常用準備  
ノ二別ヲ立テタルノニ故ニ會計法創定ノ以前ニ在  
テハ本邦全般ノ歲計ハ未タ其区分ヲ立テスト謂フ  
モ或ハ可ナルカ如シ人或ハ八期間ノ決算報告各目  
明治元年正月至八年六月決算報告各目云フ(通常歲  
入出例外歲入出ノ別アリヲ引キ前言ヲ駁スルモ)

アラシモ是レ元ト後ヨリ之ヲ擬定スルモノニシテ  
 決シテ當時ノ成例ニ非ラサルナリ但夕其事ヤ読者  
 ノ採覽ヲ博スルニ足ルモノアリ故ニ今其表ヲ作り  
 之ヲ左ニ記ス

八 期 間 歳 計 决 算 歳

通常歳入

- 第一款 地稅
- 第二款 海關稅
- 第三款 各種稅
- 第四款 官工收入
- 第五款 通常貸金返納
- 第六款 官有物所屬收入
- 第七款 通常雜入
- 第八款 紙幣發行

入 區 分 表

例外歳入

- 第九款 借入金
- 第十款 臨時貸金返納
- 第十一款 幕及官廳所持金其外公納
- 第十二款 臨時雜入

八 期 間 歳 計

通常歳出

- 第一款 各官省經費
- 第二款 陸海軍費
- 第三款 各地方諸費
- 第四款 在外公費
- 第五款 國債元利償還
- 第六款 諸福及扶助金
- 第七款 營膳堤防費



炭 出 區 分 表

例外炭出

第八款	恩賞賑恤救貧費
第九款	恩賞雜出
第十款	征討諸費
第十一款	幕府層ニ屬スル諸費
第十二款	官工諸費
第十三款	禦行實洋行勅業其他諸費
第十四款	臨時貸金
第十五款	借金返償及恩賜金
第十六款	臨時雜出

後十八年明治十四年四月會計法ノ制定ニ及ニテ始  
メテ全般ノ歲計ヲ区分スルノ制ヲ立ツ始メ會計法  
ヲ編スルノ議起ルヤ起州ノ命ヲ受クル者其区分ノ

甚夕要ナルヲ思ヒ畧々佛國ノ制ニ基キ本邦從來ノ  
慣例ヲ參照シテ之ヲ作ル今又其ノ制ヲ按スルニ先  
ニ歲計ヲ大別シテ常用準備ノ二種トシ更ニ常用ヲ  
分テ經常臨時ノ二部トシ準備ヲ分テ本部減債トス  
常用トハ地租海關稅造酒稅國債等ノ如キ若クハ國  
債償還額花ニ其利子皇室費年金諸官省費等ノ如  
キ政府ノ平通收入スヘキモノヲ稱シ準備トハ紙幣  
ノ償還花ニ國家不時ノ用ニ備フル者ヲ謂フ又夕經  
常歲入出トハ地租海關稅造酒稅等ノ如キ若クハ國  
債ノ償還皇室費年金諸官省費等ノ如キ歲々例ニ依  
テ收入支出スル者ヲ稱シ臨時歲入出トハ公債ノ如  
キ若クハ征討費大土工費ノ如キ時ニ臨テ之ヲ收支

スル者ヲ称ス又夕準備ノ本部トハ正金ヲ備ヘテ紙  
 幣ノ消却ニ充ツルモノト称シ減債トハ国債紙幣モ  
 亦夕其中ニ含まスヲ償還ニ若クハ其利子ヲ消却ス  
 ルノ原資ヲ増殖セシトスルノ意ヲ以テ其々ノ資本  
 ヲ備ヘ公債証券若クハ正金ヲ賣買シ又夕時々貸付  
 ヲ為スモノヲ称ス今十四年度ノ豫算表ニ拠テ其ノ  
 國表ヲ作ルニ即ケ在ノ如シ

明治五年所定會計法歲計区分表

- 海關稅
- 地稅
- 鑛山稅
- 北海道物產稅
- 酒類稅

租稅

- 烟草稅
- 証券印紙諸稅
- 郵便稅
- 許認用紙諸稅
- 代官免許料
- 船稅
- 車稅
- 諸會社稅
- 鏡獵稅
- 牛馬賣買稅
- 賣茶稅
- 度量衡稅

經常歲入

板權免許料	海外旅券其他免許料	海軍省造船	日 印刷	日 石炭	日 鐵道	日 電信	日 工作	日 開拓使諸作業
-------	-----------	-------	------	------	------	------	------	----------

作業益金

雜收入

臨時歲入

森林收入	官有物貸下料	開市港場官地貸下料	諸貸出金返納	官方及旧藩之貸入金返納	石高貸下返納	官有物掃下代	雜收入	雜收入	諸返納	國債償還	國債利息
內國債	外國債	紙幣消却	內國債利息								

外國債利子  
外國債雜費

帝室及皇族費

賞勳年金

軍人恩給

社寺祿

沖繩縣士族金祿

太政官

內務省

大藏省

陸軍省

海軍省

常用

經常歲出

官省院使及費

文部省

工部省

司法省

宮內省

元老院

開拓使

外國公館

地租改正局

驛傳局

內務省製作

工部省鑛山

日工作

營業資本  
瀕款  
補款

府縣費

警署費

神社費

府縣管轄土木費

救荒貯蓄補助

警視局  
二府各縣

管轄

土木

內務省製作

陸軍省兵器製作

海軍省火藥製造

興業費

工部省鑛山

日 鑛道

臨時費

日 電信

日 工作

日 探油

開拓使諸作業

旧近衛兵賞典給

上野博物館建築費

金沢兵營建築費

宮殿造管費

内閣勸業博覽會費

高洲ソルガロン府博覽會費

本部

豫備

準備

減債部

既ニシテ會計法ノ改定アルヤ(明治十五年一月)歳計ノ區別モ亦多クノ變換アルニ遇ク準備ヲ區分シテ歳入出ト爲シ又之ヲ細分シテ本部減債ト爲スノ制ヲ罷メ單ニ會計ヲ大別シテ常用準備ノ二種トシ常用ハ歳入ト歳出トニ區分シ歳入出各別テ經常臨時ノ二部トストアリ斯改定ハ能ク吾人ノ意ヲ厭カシムルモノト云フヘシ旧法ニ在テ歳計ヲ大別シテ常用準備ト爲シ準備ニ置クニ歳入出ノ部門ヲ置クヲ以テスルハ今日ヨリシテ之ヲ見レハ稍々其穩當ヲ欠ケリ(余ハ嘗テ旧法ヲ妙スルニ當リ其不當ヲ察

見シ得サリシハ責ノ免レサル所ナリ今之ヲ叙シ覺ヘス背ニ汗ス)又々準備ニ置クニ本部減債ノ區分ヲ以テスルハ事素ヨリ己ムヲ得サルニ出テ當時ト爲シ既ニ其妥當ナラサルヲ知レリ故ニ旧法ノ中減債ノ目ヲ設クト虽モ当局ノ人ハ其運用貸付ヲ停メ漸次従前ノ貸付金若クハ運用額ヲ収集整理シ以テ之ヲ本部ニ返還スルヲ勉メタリキ今ヤ改定ノ法ヲ布クニ及ニテ全然之ヲ削除シ去リタルハ其意果シテ茲ニ在ル乎然レモ改定ノ會計法第七條ニ云ハク準備ハ別段ノ規則ニ依リ大藏卿之ヲ管理スト所謂別段ノ規則トハ果シテ何等ノ規則ナル乎吾人未タ之ヲ見ルヲ得ス是ヲ以テ改定會計法ノ真意ヲ知ル

ヲ得サレナリ  
歳計ノ科目ヲ分ツノ事ハ元ト事實ノ己ムヲ得サレ  
モノナレハ其精粗ノ別ハ之レアラシモ上代及ヒ幕  
府ノ制ニ於テ必ラス之ヲ定ムルモノアリ然レモ  
既ニ前章ニ復説スルカ如ク會計ノ事目ニ係ル文獻  
或ハ散佚シ或ハ秘匿シ今日ニ傳ハラス以テ其確實  
ノ証ヲ得ルヲ得ス故ニ余今強テ之カ説ヲ附會セス  
直ニ進ンテ維新以後ノ沿革ヲ考察スルニ又夕多ク  
ノ託スヘキモノアリ  
按スルニ維新以後歳計ノ科目ヲ立ツルハ明治二年  
五月會計ノ事ヲ勅問スルニ際シ歳入出ノ比較ヲ示  
スカ為メ歳出ヲ區分スルモノニ始マル今其目ヲ案

スルニ昂ナク九ノ如シ

- 第一禁中
- 第二皇太后
- 第三後宮
- 第四神社宮繕
- 第五行政神祇外國刑法四官彈正臺公議所待詔局
- 第六民部官水利橋梁郵便牧牛馬物產其外入費
- 第七會計官造幣鑛山宮繕百官旅費其外用度
- 第八軍勢官海陸軍用費
- 第九學校及開成所
- 第十病院貧院
- 第十一製鉄所





正 六 年 計 表

通常收入

海關稅

各種稅

東京

橫濱

兵庫

大坂

長崎

新潟

郵便稅

汽車電信收入

產物稅

海關稅

正租雜稅

北海道收入

郵便稅  
汽車電信收入

科

臨時歲入

貸出金及利息

欠所物其外拂下代

贖贖

無利內國債元金

有利內國債元金

一時償還內國債

外國債

國債消却

賞賜家祿賞典米

營繕堤防費

外國交際

太政官

外務省

目 圖 表

通常歳出

各省使府縣

大藏省

陸軍省

海軍省

文部省

教部省

工部省

司法省

宮内省

開拓使

三府

諸縣

三府羅卒

府縣捕亡羅卒費 各縣捕亡及羅卒

米英佛澳公使館

紐育外六港領事館

大藏省郵便改正其他諸費

特命全權大使各州巡行費

海國博覧會費

一般臨時費預備

臨時歳出

斯ノ科目タル稍々整頓ノ実ヲ表シ之ヲ以テ前ノ分  
類ニ比スルニ勝ル丁方々ナリト云ハ仔細ニ其ノ分  
内立目ノ実ヲ見レハ猶ホ重複不倫ノ識ヲ免レス大  
ニ之レカ改良ヲ要スルモノアリ然レトモ元ト是レ  
六年ノ歳計ヲ概算スルニ際シ一時此ノ分類ヲ用フ

ルモノニ非ラス故ニ今日ヨリシテ痛ク之ヲ追論ス  
ルハ猶々嚴酷ニ失スルヲ覺フ後予居ルヲ二年明治  
八年三月ニ及ンテ豫筭調製ノ法ヲ立ツルヤ經費概  
目ヲ制シテ之ヲ各廳ニ頒ツ是レ余ノ既ニ歲計區別  
ノ項門ニ在テ引用スル所ニ係リ(茅何負)吾人ハ其分  
科ノ要畧々其宜シキヲ得タルヲ見ル今マ茅 負所  
掲ノ概目ヲ復シテ之ヲ覽ルニ當時ノ制ハ實ニ大科  
目小科目ノ二類ヲ置クモノナルヲ知ル然レトモ本  
邦ニ在テ公ニ大科目若クハ小科目等ノ名稱ヲ付典  
セシハ殆ント一年有半ノ後ニ在リシカ如シ明治九  
年十月大藏省ハ概目發布以來追次更正ノ費目ヲ編  
次シ之ニ付スルニ費目概表ナルモノヲ以テシ以テ

之ヲ府縣ニ達ス今其概表ヲ見ルニ大科目小科目ノ  
稱アリ以テ其稱謂ノ地時ニ始マリシヲ見ルヘシ  
然レモ是レ唯々大藏省ノ私定スル所ニ係リ未タ太  
政官ノ公達ヲ經ルモノニ非ラス後予殆ント三年乃  
チ明治十二年十二月ニ及シテ始メテ經費科目條例  
ヲ制定シ之ヲ各廳ニ頒ツ今其條例ノ正文ニ概テ之  
ヲ叙テシニ茅一經費ノ科目ヲ分テ四段トシ之ヲ大  
科目中科目小科目細科目トシ更ニ細節ノ一段ヲ置  
キ細節ヲ以テ細科目ニ繫ケ細科目ヲ以テ小科目ニ  
繫ケ小科目ヲ以テ中科目ニ繫ケ中科目ヲ以テ大科  
目ニ繫クルヲ制ト為セリ而シテ之ニ所スルニ各廳  
各自ノ科目表ヲ以テシ以テ照準ノ大本ヲ示ス今マ

太政官所管經費科目表及大藏省所管經費科目表  
 ヲ左ニ掲ケ以テ其一班ヲ示スヘシ

太政官	大科目	中科目	小科目	細科目	細節
	本官	參事院	統計院	大臣俸給	賞勳局法制局調查局共
		會計檢査院	俸給	參議俸給	
				各記官俸給	各記官長卜毛
				委任出仕俸給	

雜給	屬官俸給	判任出仕俸給	等外俸給	大舍人俸給	總裁俸給	編修官俸給	學記俸給	繕寫俸給	御用掛俸給	備員俸給	備外國人俸給
										備士寫字生其他官吏ノ奉勞ニ從事スル者ノ俸給	

旅費	滿年賜金	勳勵現金	大臣官舎手当	文際手当	被服料	備給	諸手当	諸手数料	賞典	贈典	死傷手当
		勳勵起衆ノ賜金事務勳勵ノ手当	官本		大臣ハ賜ル分	現物代料ノ別ナク給典スルモノ 門番(等外)ノ各義ナキモノ給任小使給 人足等馬車分車船備料諸職工賃洋價人給 臨試花寫字料等枚數當リテ以テ給ス ルモノ其他諸手当 為換手数料新聞紙廣告料 諸品入札排手数料等	功勞賞典等	外國人ハ報酬ノ類但備外國人ハ与ル分 ハ備外國人給与ニ属ス 公筆ノ為ニ死傷スルモノ給スル分			

廳費											
接待費	密用費	運搬費	電信料	郵便費	印刷費	消耗品	備品	雜費	追賞祭資	備外國人給典	雜費
外國接待ニ係ル茶菓子料理等	官本	物品運送賃荷車荷船備料運送 保檢料荷庭用品等		郵便為換料郵便管借受料共	版刻料活版料	薪炭筆墨紙等	稿子テリル時計唇籍文筐等	官物拾取ノモノノ類	非役口官員ハ賜ル分共 執費宿料等(待給ヲ除ク)一切給与スルモノ但 實与ノ為メ借入ノ家賃ハ廳費ノ雜費ニ属ス		









外國行諸費											
雜費	接待費	運搬費	電信料	郵便稅	雜品費	備外國人給与	旅費	船舶製造	船舶購買	吾所新管修繕	
					文具及雜品		官吏備員等一切之旅費	且	局不	一泰日迄五百圓未滿十分	

官給費											
何所修繕	何所新管	雜費	修船費	厩費	贈費	接待費	探偵費	運搬費	電信料	郵便稅	
同上	一泰日迄五百圓以下十分	地所連家買上移轉手當共	車稅借家料損料上水費道路修繕尾斯燈費等	取者馬丁給被服馬車馬具蹄鉄飼食馬買上等	備船手入諸品同小破修繕等	宿直其居致、賄料臨時辦當料等	當人接待之係之茶菓子料理等	物品運送賃荷車荷船備料運送保嶼料荷造用品等		郵便為換料郵便官借受料共	







興業費											
何局											
解含費											
備	死傷手当	諸手數料	備給	被服料	勉勵賜金	旅費	濡員俸給	屬官俸給			


死傷手当

備品

消耗品

印刷費

郵便費

電信料

運搬費

贈賞

各所新修繕

新費

				營業費			
			印刷局	造幣局			
		俸給		何建築費			
等外俸給	屬官俸給	書記官俸給			何所新營	何所修繕	各所新營修繕
					同上	一釐日途五百圓以上、分	一釐日途五百圓未滿、分
						一釐日途五萬圓以上、分	

建築費		器械費							
	器械修繕	雜費	賄費	運搬費	電信料	郵便稅	消耗品		
一釐日途五萬圓未滿、分		何器械修繕	何器械修繕	何器械修繕	何器械修繕	何器械修繕	何器械修繕		

工率三屬及諸器械新調修繕









上表ノ表ハ唯夕其一班ヲ示スニ過キス斯ノ外外勢  
 省內勢者陸軍省海軍省文部省工部省司法省官办省  
 元老院開拓使地租改正事務局府縣ノ如キ皆ナ者々  
 定ムル所ナリ畧ホ前ノ二者ト相ヒ類似スルヲ見ル  
 余今マ夫ノ表ヲ取テ之ヲ見ルニ興業費營業費ヲ上  
 ケテ之ヲ大科目ニ偏シ大藏省ト對排スルハ稍々不  
 倫ノ嫌ナキヲ得スト虽モ其排叙ノ大躰ニ至テハ頗  
 ル其要ヲ得殆ト又々問然スル所ナキヲ覺工是ヲ以  
 テ後々明治十四年會計法ノ制定ニ及ンテ猶ホ其制  
 ヲ襲用シテ之ヲ变换セ又十五年一月會計法ヲ改定  
 スルヤ亦夕之ヲ变换スルコトナレ  
 斯ノ如クニシテ歳出ノ科目漸ク整頓スト虽モ歳入

科目ニ至テハ久シク定マルル如クアラヌ漸ク明治十  
 四年四月ニ及ンテ之ヲ改メ實ニ大科目小科目ノ二  
 類ヲ置ク今其全表ヲ示サレニ方ナニ尤ノ如シ

大科目		小科目		
海關稅		海關輸出稅	海關輸入稅	海關諸收入
地稅		田稅	烟稅	

郵  
便  
稅

証  
券  
印  
紙  
諸  
稅

烟  
草  
稅

蓄  
麴  
營  
業  
稅

免  
許  
造  
石  
稅

押  
界  
印  
紙  
稅  
印  
紙  
稅  
印  
紙  
稅  
營  
業  
稅  
營  
業  
稅

酒  
造  
稅

北  
海  
道  
物  
產  
稅

鑛  
山  
稅

延  
納  
年  
稅  
地  
券  
征  
印  
稅  
地  
沿  
稅  
温  
泉  
稅  
市  
街  
地  
稅  
山  
林  
原  
野  
牧  
場  
稅  
郡  
村  
宅  
地  
稅

会社税	車税	船税	西洋帆帆船税	日本帆船税	船漁船兼海川小田船	馬車税	人力車税	牛車税	荷車税	国立銀行税	米高会所税	株式取引所税
-----	----	----	--------	-------	-----------	-----	------	-----	-----	-------	-------	--------

船税	代官免許料	訴訟罪状諸税	切手賣下代	外国郵便送料	私吞函料	為換手数料	訴訟用紙税	裁許用紙税	文通用紙税	蒸氣船税
----	-------	--------	-------	--------	------	-------	-------	-------	-------	------

銃  
獵  
稅

牛馬賣買免許稅

賣  
菜  
稅

度  
量  
衡  
稅

遊  
獵  
稅  
職  
獵  
稅

營  
業  
稅

請  
賣  
鮑  
丸  
料  
稅

尺  
度  
稅  
權  
量  
稅  
權  
衡  
稅

版  
權  
免  
許  
料

海外旅券其他免許手續料

作業益金，部

集  
廳  
何々  
益  
金

雜收入，部

某

所

森  
林  
收  
入

森  
林  
諸  
拂  
下  
代

官有物拂下代

森林諸貸下料

地所拂下代

家屋拂下代

物品拂下代

官有物貸下代

地所貸下料

家屋貸下料

物品貸下料

開墾場官地貸下料

租入

賦贖追徵金  
徵兵代人料  
雜收

諸返納部

諸貸出金返納

救助貸返納

勸業貸返納

外國債代償追徵金

官方及旧藩々貸金返納

官方貸金返納

右高貨下返細

旧藩之貨金返細

明治十五年一月ニ及レテ稍々其目種増損改定スト  
至モ其之ヲ大小ノ二科ニ分ツノ制ニ至テハ猶ホ未  
夕度セス依然トシテ其旧ニ依レリ

會計ヲ監督検査スルノ制ハ上代ニ在テモ亦夕畧々  
定ムル所アリシヲ見ル余今マ太寶ノ遺令ヲ按スル  
ニ中務省ニ置クニ監物ノ一職ヲ以テシ出納ヲ監察  
シ管籥ヲ請進スルヲ掌ラシム監物ノ官職ニ大中小  
ノ別アリ大監物二人中小監物各四人併セテ十人ヲ  
以テ其職ヲ掌ケシムルヲ見ル是レ上代ノ所謂ル会

計検査官ニシテ其管籥ヲ請進シ諸司ノ倉藏ヲ潤キ  
其物ヲ出納スル毎ニ之ニ監臨スルノ制ニ依テ之ヲ  
言ヘハ当時ノ検査官ハ出納アル毎ニ之ヲ検査シ以  
テ其平生ヲ維持シタルヲ知ル後キ九十四年桓武天  
皇延暦十七年ニ至テ勘解使ヲ置キ諸官在職中ノ会  
計ヲ検査シ之カ解由ヲ為スヲ掌ラシム後キ八年平  
城天皇大同元年ニ至テ之ヲ廢シ又夕居ルヲ十八年  
淳和天皇天長元年ニ至テ之ヲ復ス是レ又夕會計ヲ  
検査スル官職ノ一ニシテ監物ハ出納ノ登時之ヲ監  
察シ勘解由使ハ出納ノ後ニ在テ其解由ヲ為スヲ見  
ルヘク監物ハ稍々米田ノ督理官ニ類シ勘解由使ハ  
其ノ検査官ニ類ス

後ヲ王政ノ衰ヘ文武文政柄ヲ操ルニ及ニテ監物ノ官  
勅解由ノ使皆ナ其空位ヲ擁シテ實權ヲ有セス遂ニ  
古代百官ノ遺稱ト为リ甚シキハ監物勅解由ヲ以テ  
常人ノ通稱ト为スニ至ル但夕累世ノ將門ハ何等ノ  
官職ヲ置テ會計ノ検査ヲ为シ其ノ出納ノ年生ヲ維  
持セシメシカ今文献ノ徵スヘキモノナシ  
降テ徳川氏ノ時ニ及ニテ勅定目附ノ職アリ今徳川  
氏ノ遺老ニ就キ其掌ル所ヲ問フニ即曰ク  
維新ノ始後其會計ノ事ヲ檢束セス隨テ収ノ隨テ出  
シ濫出ノ弊頗ル多ク是ヲ以テ大隈君ノ會計官副  
知事タルヤ首トシテ内閣ニ建議シ會計ノ出納ヲ監  
督スルノ一官司ヲ置キ更ニ金穀收支ノ條例定則ヲ

設ケ其所設ノ官司ニ與フルニ之ニ照準シテ諸般ノ  
請求ヲ許否スルノ権力ヲ以テシ以テ歳用濫出ノ弊  
害ヲ防遏セント請フ是ニ於テ廷議會計官ヲ廢シテ  
大藏省ヲ置キ之ニ監督ノ一司ヲ以テシ以テ諸般ノ  
會計監督セシム監督司ノ職副今マ傳ハラス今日其  
實ヲ明言スルヲ得スト虽モ大隈君建議ノ意ヲ推シ  
テ之ヲ見ルニ其官司ノ権力稍々強大ニシテ未夕出  
納セサルノ前ニ於テ諸凡ソ會計ヲ監督スルノ實力  
アリシヲ見ル

明治四年八月大ニ大藏省ノ組織ヲ變換シ其諸司ヲ  
廢シテ十一寮一司ヲ置ク是ヨリ先キ大藏次輔伊藤  
君朝ニ建議スル所アリ乃チ米國ニ赴北米聯邦政府



大藏省ノ職制及ヒ出納條規等ヲ調査シ齋シ取ル是  
ニ於テ其條規ヲ參酌シ夫ノ十一寮一司ヲ置キ中ニ  
就テ検査寮正筆司ヲ設クルニ至レリ今マ検査寮ノ  
職制ニ就テ其組織ノ大要ヲ挙ニ本寮ハ實ニ頭権  
頭助推助及允ヲ以テ之ヲ組成シ其頭ト助トハ大藏  
卿奏請シテ之ヲ仕スルモノナルヲ知ル而シテ検査  
頭ハ金穀ノ納致支控ニ係ル諸凡ノ請求昏ヲ按シ  
出納ノ命令昏即チ傳票ヲ作ルノ以前先ツ其出納ノ  
正当ナルヤ否ナヤヲ精査シ以テ金穀ノ納出ヲ正ク  
シ並ニ各廳ノ出納計簿ヲ精査シテ後ニ出納ヲ監視  
スルノ權ヲ有セリ斯ノ草制ヤ頗ル國計ヲ檢束スル  
ノ効ヲ見ハシ大ニ會計上ノ面目ヲ一變セリ

明治七年八月ニ及ニテ時々検査寮吏負ヲ派遣シテ  
各廳ニ至ラシメ其出納ヲ検査スルノ制ヲ建テ稍々  
検査寮ノ権力ヲ加ヘ十一年ニ及ニテ更ニ其権力ヲ  
張大ニセリ十一年一月太政官ハ官院省使府縣ニ令  
スルニ今日り毎歲大藏ノ吏負ヲ派遣シ各廳ニ就キ  
其金穀出納ノ実況ヲ検査セシムト是ニ於テ検査負  
派出規程ヲ定メ之ヲ大藏省ニ令ス今マ其規程ニ就  
テ検査負ノ権力如何ヲ考フルニ凡ソ三要アリ曰ク  
毎歲二回以上各廳計簿ノ実況ヲ検査ス(第一条)曰ク  
各廳ニ在テ其年所定ノ豫算額ニ基キ周年収支ノ豫  
程ヲ定ムルモノト雖モ其成規ニ違ヒ之カ宜シキヲ  
失スルモノアラハ之ヲ更正ス(第五条)曰ク出納ノ檢

査ニ必須アラハ其何等ノ計簿タルヲ問ハス悉皆之  
ヲ点檢ス(第一條)是レナリ居ルコト数月大藏卿ハ檢  
査條例ヲ州シテ之ヲ太政官ニ奏シ其ノ裁可ヲ得テ  
之ヲ施行ス其條例タルヤ前ニ説クカ如ク大藏卿ノ  
奏請シタルモノニシテ未タ一定ノ法制ナリト斷言  
スルヲ得スト虫モ其実ニ至テハ所謂是レ會計法  
ニシテ其濶スル所甚タ重キヲ見ル而シテ斯ノ條例  
ヲ以テ大ニ検査局是ヨリ先キ察ト称セリ十年一月  
之局ト改ムノ権カヲ確實ニシ其及フ所ノ境界稍々  
廣大ナルヲ示ス今其條例ヲ通読シテ検査局ノ権カ  
如何ヲ考究スルニ第一歳計ノ豫算ヲ調査シテ大藏  
卿ノ採覧ニ供シ(第一條)第二金員收入支出スルノ前

必ラス先口之ヲ換シ其当否ヲ勘査ス(第一條)第三報  
告表若クハ勘定帳ヲ調査勘算シテ或ハ実額ト豫算  
ト差異ナキヤ否ヲ勘算シ或ハ出納ノ当否ヲ検査シ  
決算証卷ヲ交付ス(第二條)第三款(第四款)第四款計決算表ヲ  
製シテ之ヲ大藏卿ニ呈ス(第五款)第六款各廳所有物品  
ノ出納ヲ検査ス(第六款)第七款及フ所甚タ大ナルヲ  
見ル斯ノ如クニシテ検査局ノ権カ稍々備ハルト虫  
モ其実況ニ就テ之ヲ云ヘハ必スシモ然ラズ曠ル限  
ルルアリレカ如シ其故如何トナレハ當時検査局ノ  
威権ハ唯リ府縣ノ會計ニ及フノミニシテ中央各廳  
ニ及ハス小ヲ温メテ大ヲ凍マヌノ嫌ナキヲ得サレ  
ハナリ然レモ是レ甚タ咎ムヘカラヌ蓋シ一者中ノ

寮局ヲ以テ院者等ヲ監察スルハ事ノ甚ク至難ナル  
モノニシテ到処為スヲ得サルモノナルハナリ  
是ヲ以テ十三年二月内閣分離ノ舉ヲ行フヤ政府ハ  
検査局ヲ廢シテ別ニ會計検査院ヲ置キ以テ太政官  
ニ直隸シ願ル會計ヲ檢束スルノ意ヲ示ス然レトモ  
當時未ク検査院ノ職制章程ヲ定メス其権力ノ及フ  
所得テ知ルヘカラサルモノアリ後チ一年有餘ニシ  
テ會計法及ヒ検査院ノ職制章程ヲ立ツ是ニ於テ換  
査院権力ノ輕重始メテ天下ニ明ナルニ至レリ今マ  
其職制等ニ就テ會計検査院ノ組織ヲ考フルニ實ニ  
一人ノ長一人ノ副長十人ノ検査官ヲ以テ其事ヲ舉  
クルモノナルヲ見ル而シテ長副長ハ天皇ノ勅命ヲ

以テ之ヲ任シ検査官ハ太政大臣ノ奏請ニ依テ之ヲ  
任シ共ニ年限十ク天皇ノ宸旨及ヒ内閣大臣ノ意見  
ニ依テ隨意ニ之ヲ轉免スルヲ得其位置ノ強弱ヲ論  
スレハ稍々各廳以外ニ獨立シテ其職權ヲ維持スル  
ヲ得ルノ望ニアリ蓋シ當時ノ内閣ハ皆十專任ノ參  
議ヲ以テ組織シ検査官タルモノ内閣ニ對シテ自カ  
ラ顧慮スルコトナケレハナリ然リ而シテ當時ノ  
検査院ハ稍々強大ノ権力ヲ有シ會計部外ノ一要機  
タリ既ニ第 二 章ニ説キタルカ如ク當時ノ會計検査  
院ハ歲入出ノ豫算ヲ審査スルノ権力ヲ有シ稍々立  
法職權ノ一部ヲ行ヒ又々出納ヲ検査シテ其否否ヲ  
判定シ出納ニシテ當レハ認可狀ヲ付シテ當該官吏

ノ責ヲ解キ之ニシテ當ラサレハ或ハ上請或ハ專判  
シテ其罪案ヲ断シ而モ決算報告表ヲ審査統理シテ  
之ヲ内閣ニ呈ムルノ権ヲ有セリ斯クノ如クニシテ  
當時ノ検査員ハ豫算ト決算トニ對シテハ重要ノ権力ヲ  
有セシト雖モ金貨ノ現出納ニ對シテハ権力ノ及フ  
如甚夕弱ハキヲ見ル蓋シ検査局存在ノ日ニ在テハ  
国库ノ金貨ヲ出納スル毎ニ必ラス先ヨ其檢閲ヲ經  
而シテ後キ之ヲ出納セシト雖モ其廢止ノ後ハ之ヲ  
檢閲スルノ権移テ調査局(大藏省)ノ一局ニシテ検査  
局廢止ノ後キ之ヲ置キ其所掌署々検査局ニ類スニ  
存シ遂ニ検査院ニ傳致セサレハナリ然レモ国库ノ  
現出納ニ對シ全ク會計検査院ノ権ヲ除却セシト云

フヘカラス蓋シ創定會計法第九條ニ拠レハ大藏  
省ハ国库ニ於テ日々出納スル如ク金額科目及ヒ事由  
ヲ詳記シ其毎翌日會計検査院へ報告スヘシトアリ  
テ一日ヲ隔テ、国库出納ノ実況ヲ詳悉スルヲ得稍  
々之ヲ監査スルノ便アレハナリ  
斯ノ如クニシテ會計検査院ノ権漸ク定マリタリト  
雖モ其実権ヲ行フ總ニ十箇月ニシテ許多ノ変換ア  
ルニ遇ヘリ是レ即チ改定會計法改定會計検査院職  
制章程ノ發付ニシテ實ニ明治十五年一月ニ起シリ  
既ニ第 九 章ニ説クカ如ク夫ノ會計法ノ改定ハ異常  
ノ變動ヲ拿來シテ之ヲ會計検査院ノ権力ニ及ホス  
モノニシテ會計検査院ノ一点ニ就テ之ヲ云ハハ實

ニ 壯大ノ変換ヲ為シタルモノト云ツハレ蓋シ旧法  
ニ 扱レハ豫算ヲ審査スルト毎翌日国库ノ出納ヲ詳  
悉スルハ会計検査院ノ特権ナリシト虽モ改定法ハ  
其権ヲ停止シ豫算ノ審査ハ大藏省之ニ当リ国库ノ  
出納ハ毎月一廻之ヲ報告スルニ止メ会計当該官ニ  
對スル権力ノ如キモ多少損減セシテ見ルヘケレハ  
ナリ是ヲ以テ今日ノ会計検査院ハ甚々前日ノ会計  
検査院ト似ス実ニ金銀ノ出納ヲ追查シ其当否ヲ審  
査判定スルヲ以テ其特権トシ畧々丁抹ノ検査院ニ  
類スルヲ見ルナリ

我邦會計法ノ沿革及ヒ検査法ノ史誌概テ前立章中

ニ 説クカ如シ依テ今マ述説ノ步ヲ進メ現行ノ會計  
法ヲ概括シテ之ヲ條叙セシニ方ニ尤ノ如キヲ覺フ  
ルナリ

第一 豫算法ニ係ル者ヲ條叙セハ凡リ尤ノ如キヲ覺  
フ

第一 之ヲ調査スルノ責ハ各廳之ニ当リ

第二 之ヲ統理審査スルノ任ハ大藏省之ヲ負ヒ

第三 之ヲ決定スルノ特権ハ大藏省之ヲ有シ

第四 之ヲ維持スルノ任ハ大藏省會計検査院之

ヲ分擔ス

第五 毎年之ヲ議定ス

第六 之ヲ算出スルハ年度ニ先ツ六月以前ニ於

テシ之ヲ統理審査スルハ年度ノ前二三月ニ於  
テス

第七 通常單一ノ豫算各ヲ作り複雑ノ制ヲ採ラス

第八 経費ハ其總額ヲ示スニ止マラス又々其明  
細ニ及フ

第九 歳入ハ徵稅費ヲ扣除セス却テ大藏省費中  
ニ在テ之ヲ包含セシメ之ヲ外ニ表ハサス

第十 経費掲記ノ順序ハ第一国債券二帝室及ヒ  
皇族費三賞典家祿ノ類券四官院省局府縣費  
五警察費六堤防費七在外公館費八一  
時支出費九雜支出十非常豫備

第十一 之ニ付スルニ例言ヲ以テス

第十二 経費科目以下ノ流用ハ各廳長官之ヲ專  
決シ其以上ハ大藏省ノ承認ヲ受クルヲ要ス但  
タ事務ノ興廢伸縮ニ係ルモノハ大藏省之ヲ專  
ラニセス必ラス太政官ノ裁可ヲ受ク

第十三 豫算外ノ増費ハ大藏省ヲ經由シテ太政  
官ノ決裁ヲ受クルヲ要ス

第二出納法ニ係ル者ヲ條擧スレハ即チ左ノ如シ

第一 命令ノ責任ハ各廳長官之ニ當リ

第二 執行ノ責任ハ會計主務官吏之ニ當ル

第三 國庫ノ出納ハ傳票ヲ以テ之ヲ了シ現物ヲ  
受授スルハ出納一局ニ止ル

第四 各廳現金ノ管守ハ大藏省之ヲ任シ時ニ各

廳ニ委任ス

第五 記簿ハ複記式ヲ用ヒ之ヲ監視スルノ権ハ  
大藏省之ヲ有ス

第六 出納ハ年度経過ノ後八ヶ月ニシテ之ヲ閉  
鎖ス

第三 決算法ニ係ル者ヲ條擧スルニ方ニ在リ如シ

第一 租税局長関税局長国債局長及ヒ出納局長  
ハ其当該局ニ在テ納入セシ租税若収支セシ国  
債金負ノ決算帳ヲ作り之ヲ會計検査院ニ出シ  
各廳會計主務官吏ハ其出納セシ経費決算帳ヲ  
製シ年度経過ノ後十ヶ月ヲ期シテ之ヲ會計檢  
査院ニ出ス

第二 會計検査院ハ年度経過ノ後二十二ヶ月ヲ  
期シテ其審査判定ヲ終ハリ其認可状ヲ付与ス

第三 各廳ノ長官ハ歳計決算帳ヲ制シ年度経過  
ノ後二十三ヶ月ヲ期シテ之ヲ大藏省ニ送付ス

第四 大藏卿ハ国库歳入出決算報告書ヲ作り之  
ヲ大藏官ニ呈出ス但シ其時期ヲ定メス

第五 決算書ヲ公ニスルハ法ノ定ムル処ニ非ラ  
ズ然レモ従前ノ慣習ニ依テ之ヲ云ハハ時々之  
ヲ公ニス

第四 會計法ノ通則ニ係ル者ヲ條擧スレハ方サニ在  
リ如キヲ見ル

第一 會計年度ハ毎年七月一日ニ起リ翌年六月

ニ 畢ル

第二 甲乙年度ノ区分ヲ分テ甲年ノ収支ニ係ル金額ヲ以テ乙年ノ収支ニ混用スルヲ得ス

第三 会計ヲ大別シテ常用準備トシ常用ヲ分テ歳入歳出トシ歳入歳出者別テ經常臨時ノ二部トス

第四 歳入ノ科目ハ分テ大科目小科目ノ二段トス

第五 歳出ノ科目ハ大中小細ノ四科目トシ細科目中付スル細節ヲ以テス

第六 会計ノ監督検査ニ係ル者ヲ條擧スルハ即今在  
如シ

第一 出納ノ際之ヲ監査スルハ調査局(大藏省)之  
ニ 当リ

第二 出納ノ後之ヲ検査スルハ会計検査院之  
ニ 当リ

第三 調査局ハ局長及ニ属官ヲ置キ局長ハ大藏  
卿之ヲ奏請シ属官ハ大藏卿之ヲ判任シ其負ヲ  
定メス

第四 検査院ハ院長一人副長一人検査官十人檢  
査官補若干人ヲ置キ院長副長ハ勅シテ之ヲ任  
シ検査官ハ院長之ヲ奏請シ其補ハ院長之ヲ判  
任ス

以上ハ是レ現行ノ会計法若クハ検査院等ノ織制ニ



就キ其重要ノ項目ヲ摘出し之ヲ條擧スルモノニシ  
テ我カ会計法規ノ大綱ヲ示スニ止マルト虽モ読者  
能ク之ヲ熟読シテ之ヲ玩味スルアラハ其法規ノ実  
質如何ヲ了知スルヲ得ム若シ夫レ然ラハ余ハ叙実  
ノ筆ヲ茲ニ止メ將サニ章ヲ更メテ再ニ議論ニ入ル  
アラントス

